

# 郭沫若研究会報

第 31 号 (総 No. 32 号)

郭沫若岡山留学 110 周年記念特集号

## 目 次

成仿吾の歐州行 [十三]

—旅欧共産主義組織の設立、そして『赤光』発行へ

【中】機関誌『少年』から『赤光』へ／無政府主義との対決  
··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· 成家徹郎 (1)

郭沫若の日本脱出協力者のその後：金祖同と錢瘦

··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· 堀川英嗣 (13)

郭沫若と内藤湖南

——中国上古史研究をめぐる親交——

··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· 名和悦子 (25)

辛字の記憶—聖俗の両義と制度への展開

郭沫若の提起—郭沫若の「辛」字思想の展開と客觀性

··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· 松宮貴之 (33)

关于郭沫若日本亡命之行中事实记载的错误

—卢山丸的运营公司名称与上海丸启航日期误传应予修正—

··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· 岩佐昌暉 (38)

武田泰淳『風媒花』における「Q」

——戦後の中国文学研究会と郭沫若——

··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· 郭 偉 (45)

郭沫若「カルメラ娘」の二、三問題について

··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· ··· 藤田梨那 (50)

学会報告 ······ (60)  
書評 ······ (61)

編集後記 ······ (65)  
会費に関するお願い  
執筆者・翻訳者紹介

## 記念郭沫若留学岡山110周年 第八届国際郭沫若学会学術研讨会



2026年1月7日  
日本郭沫若研究会事務局  
<http://icy-saga-8795.cheap.jp/wordpress/>

成仿吾欧州行〔十三〕旅欧共産主義組織の設立、そして『赤光』発行へ  
【中】機関誌『少年』から『赤光』へ／無政府主義との対決

成家徹郎

機関誌『少年』から『赤光』へ  
(おもに『中国共産党旅欧支部史話』によって記す。)

◇理論を重視した機関誌『少年』

中共旅欧支部と旅欧中国共産主義青年団は、革命闘争における需要にこたえるため、「内部訓練」を強化しさらに主義を対外に宣伝するための機関紙を創刊した。すなわち『少年』の発行である。それによって広範な旅欧華人に共産主義思想を教育し団結させることを目的とした。

『少年』は理論面に重点を置いた雑誌であり、1922年8月1日にパリで創刊された。『少年』発行の趣旨目的について、周恩来はのち（一九二三年三月）、団中央にあてた報告の中でこう説明した。留仏勤工儉学生界で無政府主義の出版物『工余』とキリスト教の『青年会星期報』がたくさん発行され隆盛をきわめ、多くの華人を惑わせている。それが我々の宣伝活動の障害になっている。また別の一面もある。我々少年団体はこういう状況の中で、第三インターと国内共産党の戦略を理解し共産主義の学理を伝える点で、外国文の主義思想に関する著作を読むことが困難な勤工儉学生と華人労働者の要求にこたえて『少年』月刊の出版を決定した。

彼のこの記述は『少年』出版の趣旨をよく示し、めざす効果の方針を表明している。

初期の『少年』は、A4判、表紙は紅色、1922年12月に二回出版したほかは、みな毎月一回で、毎号三十頁前後であった。1923年3月1日の第七号からB5判に変え四十二頁となった。そして1923年7月1日発行の第十号から不定期の発行になった。

『少年』はいつも第三インター、少共インターの綱領、通告、各国の革命運動、労働運動の状況などに関する記事を掲載した。『少年』は読者に対してマルクス主義学説の基本的内容と要点を宣伝し、共産主義学理を広くつたえる作用を果たした。中国共産党、中国共産主義青年団の成立当初の時期において、機関誌として中国共産党の革命性質と歴史的作用に関する文章をたくさん載せ、マルクス・レーニン主義による建党の基本原則を強調した。

『少年』は、党の先鋒的および指導的役割を強調し、一般の闘争で先鋒はなくてはならない、階級闘争もまたどうして先鋒を欠いてよいものか、労働階級にとっての先鋒はすなわち共産党である、と指摘した。この機関があつて、すなわち指針がある。階級の進歩的分子はすなわち大衆全体をみちびき鼓舞して前進させることができる。『少年』はまた規律を重視する教育をおこない、「規律あって、共産党あり、規律なくして、共産党はなし。」を標語にかけた。

『少年』はさらに、共産党と青年団の相互関係および青年団の実際の任務にかかる問題についても論述した。共産党は完全に無産階級大衆を指導して共産社会にみちびくただ一つ無二の党である。団は党の指導をうける先進的青年組織であり、党のために青年を養成し、後進の人材と武闘力を養成する。つまり共産党の従属的地位にあることだ。旅欧中国共産主義青年団の実際的工作についてそれはこうは考える：欧洲共産主義の実際の運動に接触して、その活動の方法を考察し学習する。これが我々旅欧の第一使命である。もう一つ、我々は勤工儉学生と工友（華人労働者）との運動にすべて参加し、我々の職務を自覚して活動し、そして無産階級少年の全体的利益をはかる。

中国革命の道を論証するにあたって、『少年』は特に資本家階級文人・胡適の改良主義思想を批判した。当時彼は、ただ“好人”が組閣するところの“好人政府”が成立しきさえすれば、万事は大吉である、と主張した。つまり反帝とか反封建をやる必要はなく、ましてや“共産革命”などとんでもないことだ。周恩来は『少年』に「胡適の“努力”を評す」と題する一文を発表し、痛烈に批判した。

『少年』は旅欧華人のなかで共産主義の旗幟を高くかかげ、鮮明な観点をもって反駁の余地ないくらいに、共産主義革命が中国で実行される必然性と可能性を明白に強力に論証した。それが中国を救う唯一の正確な道であると指摘した。そして『少年』は旅欧華人大衆のなかで非常に歓迎される機関誌となつた。

#### ◇『赤光』発行へ

『少年』は発刊から 1923 年 12 月 10 日に第十三期を出版して以降、名称を『赤光』と変えた。この改変は国内の団中央の指示にもとづき、1923 年夏季におこなわれた旅欧共青団第二次代表大会の討論で決定した。『赤光』は半月刊で A4 判（十六開本）、毎号だいたい 12 頁、1925 年 1 月 15 日発行の第二十三期から十六頁にふやした。1924 年 2 月 1 日の創刊号から 1925 年 6 月 7 日（すなわち国内では上海の“五卅”運動が起こったあと）まで、三十三号出版し、以後また継続して出版した。『赤光』の印刷部数と発行範囲とともに『少年』よりずっと多く、その戦闘性も強くなった。『赤光』が『少年』に替った原因および『赤光』の発行趣旨はその創刊号巻首に発表した「赤光の宣言」で説明された。

まず我々は知っている、我々は遠い欧洲にいる中国国民であり、我々の故郷の政治経済の現状についていつも内情を知りたくてもなかなか分からぬのでもどかしく苦悶している。みんなのこの苦悶を解決するために、中国時事に対して評論を要するだけでなく、みんなに、その乱源の所在するところとそれ（中国）が解脱する方法を指摘したい。

つぎに我々は、いま中国はすでに列強が共同で支配するところの半植民地になっていることをよく知っている。もし我々が国際情勢についてよく知ることなく、さらに万惡の根源がどこにあるか知らないなら、すなわち中国を救う方法は、当然見出すことはできない。

さらに我々は、欧洲に居住する中国人はみな救国の熱誠を十分に有していることを知っている。だが救国の方法に関してはまだ一致の方向に向ってはいない。【中略】

我々の主張はけっして武断的主張でない。我々は科学的方法の総合をもって、各種の事実をもって我々の主張が間違っていないことを証明する。以上、理論中心の『少年』を、行動実践を主とする『赤光』に変える趣旨である。同時にこれはすなわち『赤光』の新使命ということである。

つまりこういうことを言っている。中国革命がすでに新しい歴史時期に入ったという実際情況にもとづいて、現段階の反帝国反封建に対する革命任務をよく認識し、広範な旅欧華人に“救国の唯一の道を指示し”、革命の発展を推進する。これすなわち『赤光』が担うべき主要任務である。これは革命闘争が旅欧の党と団に提示したより高い要求である。

もし『少年』を理論的説明にすぐれていたというならば、『赤光』の特徴はすなわち基本的に時事評論のための出版物であり、以下のような性格であった。

国際的国内的革命運動の実際と旅欧華人の思想の実際から出発し、典型的事件に対する報道と評論を通してわが党の路線、方針と政策を明確にし、革命をこころざす人々にどのように行動すべきか、なぜそのように行動しなくてはならないのかについて説明し、そうして広範な大衆の革命覚悟と主動性を啓発し、彼らをわが党の指導する方向、進むべき道にそって前進させる。

『赤光』は大革命時期における中国社会の基本矛盾をしつかり認識し、中華民族と帝国主義の間、人民大衆と封建勢力の間の対立と闘争をあばく。これはアヘン戦争以来の帝国主義が中華民族のもっとも主要な悪敵勢力であることを指摘するだけでなく、さらに、力強く、いま直面する各種の帝国主義国家がまさにどういう政策と手法をもちいて中国の権益を侵奪し、中国の反帝連合陣線を破壊しているか、暴露する。

そのうち『赤光』に掲載された「列強が共同支配する手法」、「英帝国主義者のチベット侵略」などはみな、帝国主義者の侵華意図と陰険な手法を、具体的に深刻にあますところなく暴露した。

『赤光』の文章は、封建軍閥の人民に対する苛酷非人道的圧迫をきびしく批判し、人民を苦しめる亡國的罪業を痛烈に批判した。『赤光』はまた、旅欧華人中で起った各種事件にもとづいて、動員を呼びかけ大衆を組織し、反帝反封建の革命闘争を展開した。たとえば1924年暮に、皖系軍閥段祺瑞（一八六五一九三六）の腹心・徐樹錚（一八八〇一九二五）がフランスへ行って、巨額の借款交渉を行った。『赤光』はさっそく「徐樹錚來仏につき旅欧華人に告ぐ」を発表し、中国人民を仏国帝国主義に売り渡す賣国奴であると激しく批判し、旅仏華人にこう呼びかけた。

立ち上がり！立ち上がり！ 革命の精神と手段を用いて徐樹錚と対決し、軍閥が旅欧界中で公然と帝国主義と結託する陰謀を阻止しよう。こうして中共旅欧支部と旅欧共青団の指導のもと、旅欧華人は、徐樹錚来仏を阻止する大衆闘争を巻き起こした。（段祺瑞の借款交渉については李春雷『赤光』250頁以下を参照。）

『赤光』は相当の頁数をもって、国際国内の革命運動の大発展という喜ばしい情報を伝え、革命新高潮の到来を迎えるため奮起するようはげました。その第一期に周恩来は「軍

闊統治下の中国」と題する一文を書き、こう認識した。広東海陸豊の農民闘争と、毛沢東が組織した湖南衡山の岳北農会は会員四万人以上を有し活発に活動しており、中国農民が近い将来、革命戦線へ進む。

周恩来、李富春、鄧小平、肖朴生、蔡暢たちが『赤光』の主要人員で編集出版の仕事を担った。『赤光』発行所には読者の感謝や激励の手紙がたくさん来た。また下記のような『赤光』を称賛する詩も寄せられた。「赤光」と題する詩であるが、その一部を紹介する。

夜氣森森　すべてが灰色の世界　だがこの一条の曙光がある　ただこの一線の赤光  
旭日は東方からのぼる　紅霞天に満つ　ありがとう　ただこの一線の導きによって  
すべての世界を光明燐爛に、光明燐爛に換える

李春雷、史克己 共著『赤光』は当時の状況をこう描いた。

夕陽は西へ下る。天空晚霞が一面みな赤く輝く。パリ十三区ゴトフロワ街は静穏でひつそりしている。誰も思い及ばないことだろう。前世紀二十年代初期の一日、ゴトフロワ街十七号の安ホテル内の小さい一室、とても「印刷所」とは呼べない小部屋で開業したのだ。印刷するのはすなわち旅欧中国共産主義青年団の機關紙『赤光』である。わずか六平方メートルの客室はまさに周恩来の寝室兼編集室である。窓から遠方をながめると暮色はすでに消えようとしている。だがここは依然として赤色の光焰がさかんにもえている。この光焰は永遠に消失しない。なぜなら、それは一代また一代と心の中でもえ続けるから。

### 無政府主義との激しい闘争

中共旅欧支部と旅欧共青団は、旅欧華人界で、思想、組織の面で敵対する勢力と闘わなくてはならなかった。特に無政府主義の思潮、影響と闘って勝利する必要があった。

旅欧華人界で最初、無政府主義の勢力と影響はそうとう大きかった。バクーニン、クロポトキンのいわゆる「無政府共産主義」学説がはやっていて、無政府主義の書籍や宣伝品がたくさん出回っていた。そしてそうとう数の旅欧青年や勤工儉学生が無政府主義の組織を成立させ、さらに無政府主義に関する出版もおこなった。

無政府主義が旅欧華人界で非常に大きな影響と勢力を有したのはけっして偶然ではなく、歴史的根柢と現実の條件による。

その一。フランスそれ自体が世界無政府主義の主要な策源地であった。早くも二十世紀初期、留仏勤工儉学運動の提唱者であった李石曾と呉稚暉はフランスで無政府主義学説を研究し、そして中国の無政府主義派理論の重要な代表者になった。1907年、彼らはパリで中国無政府主義“第一の言論機関”と称して華語誌『新世紀』週刊（活字本）を創刊した。この刊行物は1907年6月23日に創刊、1910年5月21日に停刊するまでに、あわせて一百二十一期を発行した。中国国内における早期無政府主義者の主要な代表者である劉師復はこう述べた

『新世紀』は3年間継続して出版した。編集者李石曾は熱心であったばかりでなく学理をよく研究していた。フランス人ベルギー人と親密に交流し、クロポトキンその他著明

学者の著作をしばしば華語に翻訳した。また小冊子もたくさん刊行して宣伝した。中国無政府主義の種子は実にここから広がったのだ。欧州の中国留学生で感化された人はことに多かった。

『新世紀』は西欧で唯一の漢字印刷所 - 中華印字局で活字印刷され発行量は非常に多かった。このほか李石曾、呉稚暉たちはさらに『新世紀叢書』を刊行し、もっぱら世界の著名な無政府主義者の論文を翻訳発行した。1912年と1913年、中国国内で最初の無政府主義団体「晦鳴学舎」は機関誌『民声』を出版した。そこが発行した『無政府主義粹言』と『無政府主義名著叢刊』はともに『新世紀』中の名著から選録されたものだ。よって、国内の無政府主義者はみな、中国無政府主義の源流としてほとんどこれを尊崇し、ここ（『新世紀』）に始まる、と認めている。

その二。二十世紀二十年代初期、李石曾、呉稚暉はフランスで、勤工儉学生および旅欧青年学生と密接な関係を持つところの華仏教育会とリヨン中仏大学を主宰した。彼らは仕事上の地位を利用して青年たちに関連書籍を強く推薦し販売した。たとえば華仏教育会がある華僑協社内はまさに無政府主義の各種書籍であふれていた。彼らはさらに手にする権力を運用して、勤工儉学生の中で無政府主義を信奉するものとそれに反対するものの間に経済面などの待遇で差をつけて、彼らの側に引きつけた。しかももと国内にいた主な無政府主義分子例えば、区声白、華林、李卓、劉石心（劉師復の実弟）、劉抱蜀、劉無為（この二人は劉師復の妹）、彼らは次々にフランスに来た。彼らのうちある人（区声白、劉抱蜀、劉無為）は呉稚暉（リヨン中仏大学校長）の世話によって中仏大学にはいって勉強し、またある人はパリや近郊で勤工儉学の生活をした。彼らはいつも互いに密に交流し親しい関係にあった。この情況がパリを中国無政府主義分子の重要な集合地とし、無政府主義者の陣容は旅欧華人界でますます増強された。

その三。無政府主義者が宣揚するあの“真・善・美”という感動的詞句は、社会経験のないまたは理論修養が欠乏している青年を容易に誤った方向に導く。無政府主義者が鼓吹するあの“強権に反対”、“一切の悪制度を排除”、“経済上政治上の絶対自由”、“財富は社会公有”、“労働者の自由により採用”、“自由平等博愛”など、暗黒社会の現状を痛烈に批判しうらみ、人類の美しい世界を渴望する熱血青年には確かにそうとう大きい吸引力があったことは言うまでもない。まさに李維漢が述べるごとくである。彼はこう言った。

（1979年の回想）

我々は出国前は、ロシア十月革命とマルクス主義の書籍に全然あるいはほとんど接触することはなかった。だから我々はまよった。救国の道は如何に？ 真理はいずこに？ 我々はずっと蒙昧の中にあり、頭の中は基本的にやはり白紙だった。我々はあの無政府主義と空想社会主义の書物を読んで、書物の中に描かれた社会主义と共産主義のうるわしい遠景に対して、あの、人が人を搾取し、人が人を圧迫することのない、人々が労働し、人々が学習する平等自由の境遇に対して、非常に新鮮で美しいと感じ、これこそ我々が奮闘すべき目標であるべきだと考えた。

以上述べたことが、無政府主義思想を旅欧青年界に満ち潮のように氾濫させる要因だ

った。

1921年秋、華林、李卓たちはフランスにいる無政府主義分子数十人を糾合し無政府主義派の組織「工余社」を成立させた。この社の成員はおもにパリ付近の勤工儉学生だった。工余社という組織はそういう厳格で活動は規律をよく持っていた。ふだん毎週一回成員全体の会合を開いた。おもに無政府主義理論の心得や日常実感したことなどを話し合いながら学習した。また共産主義者との論争等の問題についても討論した。呉稚暉、李石曾は思想理論分野で工余社に対し大いに支持し、とても大きな影響をあたえた。さらにリヨン中仏大学の無政府主義分子の区声白たちは思想上でも活動上でも組織上でも工余社と密接な関係を保持した。このほか、工余社は国際無政府党の人物たとえばフランス無政府主義の“棟梁”のひとりグラーヴといつも交流した。たとえば工余社の責任者李卓はグラーヴの家に行き、中国無政府主義派の情況について話し合った。またさらに日本の著名な無政府主義者・大杉栄がフランスに来たとき、工余社およびリヨン大学の区声白、劉抱蜀、劉無為たち十数人がある中学校の中で数日間にわたる談話会を開催し、彼に講話と活動工作の指導を要請した。

このほか彼らはフランス無政府主義者の日常活動にもいつも参加し、またフランスやベルギーで開催された無政府党人の国際会議にも参加した。よって、工余社は人数は多くなかつたとはいえ、社会で広く連携をとり、活動量はとても大きく、旅欧華人の間でそういう大きな影響を有した。

1922年1月15日、工余社はパリで機関誌『工余』を発刊した。これは月刊で贋写版印刷、A5判で毎号40余頁あった。印刷数はふつう4、5百部くらいで、合せて23期(23号)出した。その編集場所はパリ西郊コロンブにある工余社成員の住居で、主要編集者は工余社の責任者のひとり李卓であった。

この『工余』を通じて工余社は国内の北京、上海、天津、アモイ、成都、長沙、太原等の無政府主義組織と個人的に密接な関係を保持し、また北京國風日報館や米国の著名な無政府主義者・黃凌霜、およびカナダ華人工会の松石らと連携して遠く世界各地に販売することができた。国内における同時期の少なからざる無政府主義刊行物、たとえば『学彙』、『互助』等はいつも『工余』掲載の記事、情報を転載し、また工余社成員の文章も掲載した。これで分かるように『工余』と工余社は、国内における無政府主義の宣伝と活動に大きな影響をあたえた。

『工余』は各国の無政府主義者の組織と活動情況をすみやかに伝え、また国際無政府主義組織の会議内容、関連情報、決議などもたくさん掲載した。その中に「全フランス無政府党大会紀要」(第13号掲載)、「サン・ティミエ(スイス)の五十年記念大会紀略」(第14号掲載)(参照 大杉栄『日本脱出記』土曜社2011:成家)、「アメリカ無政府党、ロシア革命が世界の無産者に向けた宣言へ」(第17号)などがある。これらの文章には、工余社成員が自ら現地に取材して書いたものもあり、また他国の無政府主義刊行物掲載を華語訳して載せたものもある。『工余』は無政府主義の一般的学説を宣揚したばかりでなく、たくさんの紙幅をついやしてマルクス主義の革命理論を集中的におとしめ、無産階

級專制のソヴェトロシアにおける個別の政策や実施方法を呪詛し、共産主義革命を提唱し推進する中国共産主義者およびその革命方針、策略を攻撃した。

これは、彼らと 1921 年以前の無政府主義者と比べた場合、一つの明瞭な変化が生じたことを示している。すなわち共産主義者と無政府主義者間の討論の中心と重点は、もとの“一般的理論”を討論するという段階から、革命の戦略、やり方、政策方面に対する討論に転変した。それゆえ論争にそうとう明瞭かつ強烈な政治的性格を帯びるようになった。これは、五四運動時期のマルクス主義と無政府主義思潮間の論戦の継続と深化であり、この論戦は本質上かつ実践上の重大変化である。この時期、無政府主義派の言論と行動の中で共産主義学説を敵とする、と明確に宣言したばかりでなく、さらに共産主義革命を実行する団体と個人に対して全力をもって反対し攻撃した。彼らはこう主張した：我々無政府主義者が反対するのは人類の罪悪である。罪悪が存在するところ、それが何に属するかは問わない！ 罪悪こそすなわち我々の当面の大敵である。さらにもっと筆鋒鋭くしてこう言う：すでにある罪悪は早くにその原形を露わにした。万人はすでに厭棄し、すたれて危ういところに近づいた。ひとりあのいま盛んになりつつある罪悪はかえって迷霧を造りだして、潜毒はまだ表に出ていないがまさに近い将来、人類の伝統にとって革命を汚すこと明らかな旗幟となるであろう。彼らの隐患をとっくに見透かしている人は、いままさに立ち上がり大きな声で覚醒させるべきだ。

ここに言う“いま盛んになりつつある罪悪”とは何か？ 『工余』掲載の論評は、明確な脚注を書いた。無政府主義者・労因はこう書いた：

共産主義者が高々と唱える無産階級專政は、彼ら自身わいわい騒いで理論を弁護しているが、これと、赤いロシアがなしたところの事実は、真剣熱心に革命問題を研究する人に対して一つの十分に明白な解答を提示する、すなわち、人類の新たな罪悪が生み出すところの制度であることをずっと前から明瞭にした。

これによって、彼らはロシア新興のソヴェト制度と中国共産主義運動を“いま盛んになりつつある罪悪”とみなしだいに攻撃を加えているのは明らかだ。そして自己を、この種の“罪悪”を打ち破るところの先知者で先鋒軍として振舞っているのだ。

だから『工余』のいくつかの号で、それらの全部を“共産党に対処する”特集にしたのは、もっともと思われる。

共産主義を広めるにあたって、以上述べたような問題があった。ゆえに旅欧共産主義組織の建設初期において、無政府主義は、思想、政治、組織いずれにおいても旅欧共産主義者の主要な対立勢力となった。無政府主義派に反対し勝利を勝ち取ることができないなら、共産主義思想は旅欧華人界で深く根をおろすことができず、共産主義運動は旅欧華人界で普及拡大することはできない。

#### ◇鋭く対立して論争劇烈

劇烈な闘争が始まった。『少年』と『工余』はそれぞれにとって重要な論戦陣地となつた。1922 年 8 月、著名な無政府主義者・区声白たちは『たわいのない宗教』と題する小冊子を編集出版し、旅欧勤工儉学生と華人労働者に広く配布した。この中に「宗教の根を

いかにして掘り除去するか」という一文があり、共産主義は宗教と同じだと主張した。つまり共産主義者はマルクスを教祖とし、『資本論』と『共産主義宣言』は聖書（あるいは経典）であるという。これに対し共産主義者はただちに反撃を始めた。

1922年9月1日に出版した『少年』第二号上で、『たわいのない宗教』に反論するための専門欄を開設し、周恩来の批判文「宗教精神と共産主義」を掲載した。彼はこう指摘した。

マルクス主義は革命の科学であり、宗教の教義ではない。マルクスから一つの科学の精神が出て、現代の経済組織における、物質社会の最大の欠陥をみつけ出し、また、生産力の変遷があり、それが経済組織が必然的に崩壊する態勢を起こさせる。また他の一面で、人類史の中から階級闘争の痕跡をみつけ出し、現今の“下層階級”はすなわち現代経済組織（構造）に依拠するもつとも落伍したもつとも困苦の内にある無産階級であることを知った。“痛苦の根源を芟除”しようとするなら、この階級境界を消滅させ、経済変遷が可能とする進路にそって、自ら、“もつとも公平な分配方法”をつくり出さざるを得ない。もつとも有効な生産制度は、生産者がその生産品を公有し、同時に分けあう、これすなわち共産主義が由来するところであり、まさにマルクスの全経済学説も明確に証明している。革命にいたっては、さらに“痛苦を芟除する”ために不可避の方法である。マルクス学説は人類に、正しい解放を実現するための唯一の正確な道筋を明確に示した。宗教のあのような虚偽の“空想的未来の天国に引き入れ”人心を惑わすものではない。同時に周恩来はまた、自己の行動を指導する完璧な思想体系つまりマルクス学説だが、これに対し堅固でゆらぐことのない信頼をいただきいかなる動搖もあってはならない、と指摘した。マルクスの著作を貴いものとして重視し、さらに進んで「経」と呼ぶことも不適切とは言えない。

レーニンは『国家と革命』でこう述べた：

無政府主義者の描く国家廃止のイメージは筋が通っていないし、革命志向でない——。まさにこのようにエンゲルスは問題を設定しているのである。他ならぬ革命というものがどのように発生し展開するのかとか、暴力・権威・権力・国家に関して革命がいかなる固有の課題を負っているのかという点で、無政府主義者は革命というものを分かろうとしていない、というのである。

（レーニン著、角田安正訳『国家と革命』講談社学術文庫 2011、118 頁）

【以下略】

中国のアナキズムに関する文献

畢修勺著、坂井洋史訳「無政府主義者になった頃のこと」

『中国アナキズム運動の回想』総和社 1992

坂井洋史、嵯峨隆 編『原典 中国アナキズム史料集成』（全12巻+別巻）

緑蔭書房 1994

第7巻 『工余』1924年9月31日号 影印収録（解説は「別巻」）

嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』研文出版 1994

◇大杉栄、フランスでの活動 - 大杉栄、上海を経て、パリへ行く -

1922年に、翌年1月か2月にベルリンで開かれる予定の「国際無政府主義大会」に参加してほしい、という招待状を受け取った。また日本で、大韓民国上海臨時政府から派遣された人物から、上海に来てほしいと要請を受けた。よって上海経由でフランスへ行くことにした。1922年12月14日、神戸で乗船、12月17日上海着。

上海では臨時政府国務総理の李東輝、呂運亨（臨時政府外務總長）、中国共産黨の陳獨秀等と会談する。またコミニテルン東アジア書記局責任者のヴォイチンスキーとも会った。「国際無政府主義大会」が延期になったという通知を前に受け取っていたが、その後4月1日に決まったという通知を得た。そこでそれに間に合うように23年1月5日、中仏大学留学生の身分でフランスに向った。2月13日、マルセイユ着。フランスで、この大会はまたまた延期でいつ開かれるか分からない、という通知を得た。メーデーで演説をするが、そのあとすぐ逮捕された。5月24日に釈放。国外追放の刑になったので、帰国した。1923年6月3日、マルセイユで乗船、日本に向う。7月11日、神戸着。

大杉がフランスにいた時期、親しく付き合った林倭衛はのち「仏蘭西監獄及法廷の大杉栄」を書き、月刊誌『改造』に掲載された。雑誌掲載にしては少し長い記事だが、その最後をこう締めくくっている。ここに出てくる「J」は、おそらく区声白ではないかと思われる。その細君は劉師復の妹である。林文には“ただ単に大杉に関連したというだけで、他に何の理由もなく、仏国政府から追放命令を受けた。”とある。

二三日の後Jは（リヨンから）巴里に来た。Jがいよいよフランスを追われる夜、僕はJの仲間の支那人六七人と送別の晚餐を共にして、その夜のうちに独逸へ落延びるJと訣れた。Jは今もなお追放のまま不自由な身をフライブルグにとどめて居る。病身な彼の細君は里昂（リヨン）にひとり残されている。

僕は八月十日頃Jの追放された事を大杉に知らせたが、恐らくその手紙は今度の大震災に遭って紛失したか、或は彼の手に這入らない前に、彼は殺されていたろうと思う。

一九二三、十二月三十日 巴里にて

大杉栄のフランスにおける行動は、下記文献参照。

林倭衛「仏蘭西監獄及法廷の大杉栄」『改造』1924年6月号（大正13年）

大杉栄『日本脱出記』土曜社 2011

大杉豊『日録・大杉栄伝』社会評論社 2009

上海における朝鮮人の独立運動は呂運亨たちが中心になっておこなった。呂氏をはじめクリスチャンが多かった。そして弾圧が厳しい日本でも活動は行われた。『郭沫若年譜』（天津人民出版社 1992）に、これに関連する記述が見える。

1920年10月10日

5日に、日本東京で開催された「世界日曜学校」第五次代表大会で起った情況に対して、

「狼群中の一匹の白羊」と題する詩を作った。その大会中に、朝鮮人白牧師が登壇して植民地主義の罪業を訴えたとき、大会の主催者がただちに意図的に閉会を宣言した。郭沫若是詩中で白牧師を称揚して“聖潔なる老人”とし、帝国主義者は“羊の皮をかぶった狼群”であると激しく怒り、“社会のどこに聖徒、宗教、自由、人道、平等、同胞などあるのか”と大声で疾呼した。“どんなに悲憤慷慨しても”、何の役にもたたない、重要なことは“拳銃、爆弾、鋭利な刀を手にとって彼らと共に命がけで闘うことだ。”この詩は 20 日、上海『時事新報・学灯』に掲載された。

これに関連する記事は『呂運亨評伝』(2) にこう書かれている。

一九二〇年秋（十月五日～十五日開催）、日本万国主日学校大会〔日曜学校〕での「敵ノ我教会ニ対スル蛮行ヲ世界教会代表ニ自然発露セシメ」る指示や、続く、「中国教会ニ我韓教会ノ惨状ヲ受ケシ」ことの告発や「欧米各地ニ於テ我事業ニ同情セラルル諸氏ニ感賀状ヲ送致」などの活動はその一環であった。主日学校大会で演説した朝鮮代表は李商在とみられ、その演説を聞いた中国代表郭沫若が感動したとの話が伝わっている。

上海における朝鮮人の独立運動については下記文献参照

姜徳相『呂運亨評伝』(2) 「上海臨時政府」 新幹社 2005

石源華『韓国反日独立運動史論』 中国社会科学出版社 1998

『郭沫若年譜』にはまた無政府主義に関する記述も見えるのでついでに紹介しよう。

1920 年 9 月 23 日

『棠棣之花』、この詩劇は戦国時代、聶嫗が弟の聶政に韓国の宰相・侠累を刺殺するように励ました故事を借りて、辛亥革命以来の軍閥のやむことない混戦を暴露し、人民が殺し合いの世に生きて、また飢饉の苦しみにあえいでいる、あたりに満ちているその害を除かなくてはならない、と考える。詩人は聶嫗の口を通して自分は祖国に献身する決心を明示した：生を久しくむさぼるを願わず、ただ轟々烈々たる死を願うのみ。己の一命をもつてあの蒼生を救うために起つ！

だが彼が歌頌するところの、聶政が“悪人を誅鋤する”という行動について自ら、“一種無政府主義の色彩を帯びている”と言う。

（参照 須田禎一訳『棠棣の花』、「筑」）（郭沫若史劇全集 2）講談社 1972）

#### ◇王独清、フランスで大杉栄に会う

今回、リヨンで、無政府主義者の大杉栄に出会った。大杉は、後に日本で地震があった時に、野蛮な日本当局に暗殺されてしまった。たぶん次のようなことを、まだ覚えている人がいるのではないだろうか。それは、まさにこの年、日本の警察が、大杉栄の行方を見失ったために、狂ったように北京や上海を探し回ったということである。中国と日本の新聞はみなもの珍しいこのニュースを鳴り物入りで伝えた。それはまさに、大杉栄が秘密裏にフランスに逃げた時のことだった。彼がフランスに来た原因是、どうやら無政府主義者の何かの会議に参加するためだったらしい。彼はリヨンに滞在し、中国人を装い、中国の

何人かの無政府主義者といっしょに住んでいた。私が彼と会ったのも、他の人が私に、彼と他の人の談話の通訳を依頼したことによるものだった。

彼は寡黙ではあるが、明らかに個人主義の色彩が強い人だった。色黒で、痩せチビで、眼は聰明な光芒を放ち、同時に短い口髭を蓄えていた。だが少しの曖昧さもなく、極端に偏屈で頑固な性格だと見てとれた。彼の言葉や行動は、私が会ったことがある無政府党員の中で、最も典型的な人物だったと言える。日本では、彼はフランス語に秀でていることで知られていたが、実際はそれほどでもなかった。彼のフランス語は、何とか読んだり、書いたりすることはできた。しかし会話はできなかつた。彼が平民の理解者だと他の者に伝えたいために、彼はいかにもわざと不自然に最下等の日本語を話した。私は彼の口から、無政府主義者の未来社会の改造に対する構想を話してもらいたいと切望した。しかし、どうしてもその目的を果たすことができなかつた。ある時、私が彼に激しすぎる口調で尋ねたところ、彼は怒ってこう怒鳴つた。「おまえに言うが、構想などありはしねえんだよ！　たとえ未来の社会が真に構想など立てる必要があったとしても、俺たちに構想なんぞ言えるわけがねえんだ！」

私はまた彼に、それはなぜかと聞いた。彼はこう答えた。「なぜなら一旦構想を話しちまつたら、その途端に、もうそれで無政府主義者ではなくなっちまうからだよ」

彼は私に、とてつもない秘密を暴露してくれた。私は、なぜ無政府主義者がいつも理論の討論を避けるのか、その時、その理由がはじめてわかつた。

王独清が大杉栄と会った時期について、訳者池澤の注は、1923年の2月 - 4月の間であろう、と推測する。

王独清著、池澤實芳訳「私のヨーロッパ滞在記」〈4〉

『商学論集』第80巻1号 2011年7月 福島大学経済学会

『日録・大杉栄伝』に、王独清に関する記述は何もない。

最近たまたま下記訳書を読む機会があった。その「訳者あとがき」にこういう記述がある。

しかし、（中国に対する）日本の影響は、当時のマルクス主義思想の伝播過程にさえ見受けられるほど甚大だったのである。シナで読まれたマルクス主義の文献は、ことごとく日本語からの重訳であり、ロシア語からの直接の翻訳は一九五〇年代になるまで現われなかつたという（岡田英弘著『中国文明の歴史』講談社現代新書二〇〇四年、255ページ以降）。

中山理訳、渡部昇一監修『完訳 紫禁城の黄昏』上下 祥伝社 2005

これを見て、この連載もちょっと存在価値があるようだと思い、すこしうれしい気持に

なった。

パリで発行された『赤光』の表紙

“ Lumière Rouge ”

“赤光社 編輯發行”と書かれている。



○《赤光》封面

李春雷、史克己 共著『赤光 - 留法勤工儉學運動紀實 - 』

河北大学出版社 2010

# 郭沫若の日本脱出協力者のその後：金祖同と錢瘦鉄

堀川英嗣（北京外国语大学准教授）

朱文劍（中国宋慶齡青少年科技文化交流中心教師）

## 一、はじめに

郭沫若の帰国については郭の自伝『海濤』、殷塵『郭沫若秘密帰国』や青山和夫『謀略熟練工』及び先行研究を併せ読むことである程度全貌を理解することが出来る。一方で、郭の帰国を支援した人たちのその後についてはこれまであまり語られてこなかったように思われる。

本稿では、郭沫若とともに帰国した金祖同（甲骨文研究家、出版家）、帰国の手配を行った錢瘦鉄（書画篆刻家）の二人に焦点を当て、郭沫若の帰国を巡る彼らの動きとその後の人生について論じ、戦時下における日中文化・政治交流の複雑な実態の一端を浮き彫りにしていきたい。

## 二、金祖同：学者としての貢献とその限界

### 1、家学と学問的背景

金祖同（1914–1955）は浙江秀水（現嘉興）の人。回族。字は曉岡、ペンネームは殷塵、斎号は鄆齋。著に『殷契遺珠』『郭沫若秘密帰国』等がある。<sup>①</sup>祖父金爾珍（1840–1919）は書画家、父金頌清（1878–1941）は羅振玉に師事し甲骨学を学び、1926年に上海で中国書店を開いた。同店の常連客には魯迅、郭沫若、鄭振鐸、阿英等がいた。

金祖同は家学の薰陶を受け、早くからその学才を開花させ、15、16歳から文字学者の鮑扶九（1898–1973）につき学問を治めた<sup>②</sup>。17歳（1931年）には甲骨文の研究を始め<sup>③</sup>、22歳（1936年）で中国書店の経営に携わる<sup>④</sup>など早熟の人であった

<sup>①</sup> 本稿に関連する金祖同についての先行研究には郭成美（2008）「回族学者金祖同」、（2009）「国学大师致回族学者金祖同之書函、為其著作序文」、張煒（2022）「近代海上研究系列之廿三—鄆齋主人金祖同」がある。

<sup>②</sup> 「予年十五六、即篤嗜款識文字、時学文章于丹徒鮑扶九先生」、金祖同「鄆齋金石図錄序文」『唯美』1935年第10期、31頁。

<sup>③</sup> 「問業于葉洪漁先生得見殷墟卜辭」、金祖同「氈墨贅言」『説文月刊』1940年第1卷、409頁。

<sup>④</sup> 「上海中国書店的小主人金祖同君」『晶報』1936年7月18日。

## 2、日本滞在期間における郭沫若への協力

1936年7月、金祖同は沈尹默の出資を受け来日<sup>①</sup>、収蔵家を訪ね多くの書跡資料を収集し<sup>②</sup>、郭沫若に師事し週末は市川の郭沫若宅にて甲骨文の研究に励んだ。<sup>③</sup>二人の初対面は1934年2月<sup>④</sup>（金祖同20歳）とされる。

郭沫若と金祖同の年齢差は22歳、郭にとっては年下の大切な友人であったようだ。郭に篆刻家の河井荃蘆を紹介したのも金祖同である。来日当初、金祖同はしばしば父金頌清の友人である河井に教えを乞っていた。<sup>⑤</sup>河井と郭に面識はなく、郭は金祖同とともに河井所蔵の三井本『石鼓文』拓本写真を見るために河井家を訪れた。初対面のこの日、郭沫若はお目当ての写真を借り出し、河井は郭に『書苑』への寄稿依頼をした。<sup>⑥</sup>

## 3、郭沫若題跋『殷塵篆刻例』

1937年7月25日、郭沫若と金祖同は神戸からカナダ船「エンプレス・オブ・ジャパン」で帰国の途に就いた。金は帰国後も郭と行動を共にし、郭の『救国日報』雑誌<sup>⑦</sup>に編集場所を提供<sup>⑧</sup>するなど出版事業を通じて支援した。

帰国から間もない1937年10月10日、郭沫若は金祖同のために篆刻潤例『殷塵篆刻例』（図1）を書き、「殷塵仿漢」と題した8顆の印影とともに発表した<sup>⑨</sup>。

日本では未発表資料と思われる所以、以下に全文を記す。

① 「尹墨先生助我膏火、俾東渡游学」、金祖同「氈墨贅言」、409頁。

② 「朝夕困于語文之学閑則輒趣各藏家借拓、具倒濮以逆、未半年、得河井荃蘆氏、中村不折氏、中島蠟叟氏、堂野前種松氏、田中教堂氏凡五家」、金祖同「氈墨贅言」、784頁。

③ 「從沫若先生治殷契文字」、金祖同「氈墨贅言」、784頁。

④ 周文玖「師生厚誼甲骨情：郭沫若与金祖同」『史学理論与史学史學研討会論文集』2018年、452頁。

⑤ 金頌清は羅振玉とともに安陽で甲骨文の発掘に携わり、数多くの甲骨文を収蔵した。河井荃蘆が収蔵した甲骨文の一部は河井が上海を訪れた時に金頌清から譲り受けたものである。殷塵著、さねとうけいしゅう 訳『郭沫若日本脱出記』、第一書房、1979年、66頁。

⑥ 『書苑』雑誌第1巻第1号（1937年）に郭沫若の紹介で金祖同と章太炎の書簡四通が掲載された。

⑦ 1937年8月24日、上海文化界救亡協会は上海で『救亡日報』を創刊。社長を郭沫若、編集長を夏衍任が任じた。抗日の宣伝が多くを占める。1937年11月22日に停刊。その後は広州、桂林で停刊と復刊を繰り返し、1945年まで刊行。

⑧ 葉靈鳳は『救亡日報』の編集について、当時は『救亡日報』に関する不利なうわさが流れたため、大陸商場の事務所を放棄し、中国書店の厨房で編集作業を行い、「每天晚上、在隱蔽的灯管下、大家就在那里工作」「年輕的金祖同、在當時日本人橫行的租環境下、敢于借出其他書店的余地提供救亡日報使用、其實是非常勇敢的行為」と記している。葉靈鳳『讀書隨筆 第三集』三聯書店、1988年、68頁。

⑨ 『説文月刊』1941年第3巻第2-3期、4-5頁。

「殷塵篆刻例。殷塵囊東游、從余治殷契文字。凡彼邦藏家所蒐甲骨、拓存殆尽。亦頗有述作、用功之勤、世所僅見。近復出其緒余、改事鉄筆、終日弄石、一以秦漢遺矩為歸、不作啊世態、蓋有見其懷抱。余不諳即而樂為訂潤者、將以俱其人而作其所作也。殷塵金氏、浙西人。廿六年十月十日。郭沫若。石章每字二元。過大過小每字均作三字算。劣石不應。摹旧不應。金玉晶牙亦不應。殷塵云將以游於芸、非匠作也。」

(殷塵篆刻潤例。殷塵はかつて日本に赴き、私につき甲骨文字を研究した。彼は日本のコレクターが収集した甲骨拓本のほとんどを写し取り記録した。多くの研究業績があり、その努力は稀にみるものだ。最近は余技として篆刻を始め、始終石を刻している。作風は秦漢時代の様式にのっとり、世間の風に媚びることはない。そこには彼の志が見える。私は篆刻に詳しくないが、喜んで潤例をつけることにする。それは彼を支援し、その創作活動を応援するためだ。殷塵、姓は金。浙江省西部の出身。廿六年（1937）十月十日。郭沫若。石は一字につき二元。大きすぎたり小さすぎたりする石は一字につき三字分として計算する。質の悪い石には応じない。古印の模刻にも応じない。また、金・玉・水晶・象牙の刻にも応じない。殷塵は芸の境地を追求するのであり、単なる職人の仕事ではないと言う。)

「殷塵囊東游、從余治殷契文字」とは、1936年7月3日の金祖同来日を指す。金の来日は当時、「金祖同携五万甲骨赴日考察郭沫若共同考证」（『世界晨报』）や「金祖同东渡和郭沫若研究甲骨文须一年以后可回国」（『鉄報』）と報道された。郭沫若是「劉氏のコレクションの豊富さと鑑定の精緻さは、以前から承知していた。あなたが解説を担当するとは誠に喜ばしいことである。どうか立派に成し遂げてほしい」<sup>①</sup>と励ましの言葉をかけている。郭沫若是劉氏コレクションから1595片を精選し『殷契粹編』（1937年）を出版した。

郭沫若是「普段はめったに他人の序文を書かず（平時很少換人作序）」、「そのようなことは一種の侮辱だ（覺得那種事情是一種侮辱）」<sup>②</sup>と考えていたが、『甲骨文弁証』、『殷契遺珠』、『龜卜』など金の多くの著作に序文を寄せており、郭が如何に金を大切にしていたか分かる。

#### 4、帰国後の活動と晩年

金祖同は戦後、台湾大学で教鞭を執るも1948年に上海に戻り<sup>③</sup>、1948年から1949年まで

<sup>①</sup> 「劉氏收藏之富、鑑別之精、久所知悉。吾弟担任釈述、誠是幸事、幸好為之」、黃淳浩編「致金祖同信」『郭沫若書信集 上』中国社会科学出版社、1992年、426頁。

<sup>②</sup> 郭沫若「序威『廉邁斯達』」、『説文月刊』第2卷第6、7期。

<sup>③</sup> 『申報』1948年7月27日。

中国福利基金会の理事を任せた<sup>①</sup>。1949年には『透視』雑誌を創刊し、暁岡のペンネームで「孫夫人：民主、和平的象徴」を執筆している。この頃に宋慶齡に印を刻しているが（図2）、これも郭沫若が間にあってのことであろう。<sup>②</sup>1951年に上海図書館に勤めたが、1955年に入水自殺。41歳でその生涯を閉じた。

金祖同は河井荃廬の他に、もう一人重要な人物を郭沫若に推薦している。錢瘦鐵である。

### 三、錢瘦鐵：芸術家と諜報員の二重身分

金祖同と同じく郭沫若の帰国に深く関係した人物に錢瘦鐵（1897—1967）がいる。錢は書画篆刻家として著名であったが、同時に許世英（1873—1964、1936年に駐日大使就任）や王芃生（1893—1946、1935年に駐日大使館参事就任）の下で諜報活動を行っていた。錢瘦鐵は郭沫若に「帰国の意思をたしかめて、本国に通知し、政府の同意をとりつけた」<sup>③</sup>他に、帰国ための切符手配なども行った。

#### 1、芸術家としての出自と日本におけるネットワーク

錢瘦鐵は江蘇省無錫の人。書画篆刻家。名は厓、字は叔厓、号は瘦鐵。少年時代から蘇州で書画は鄭文焯、詩を俞原に、篆刻は吳昌碩に益を受けた。上海で橋本關雪の知遇を得、1923年以降は幾度も来日し日本文化人と交流を深めた。また書道専門誌『書苑』の「顧問及客員」を任せた。享年71歳。

#### 2、郭沫若帰国への関与と諜報活動

錢家には「我五十七年以来回憶」と題した錢瘦鐵の直筆メモが伝わる（以下「自筆原稿」）。同資料を踏まえて当時の様子を再現していきたい。

郭沫若との出会いについて自筆原稿に「一九三七年東京に引っ越し、三省堂出版『書苑』雑誌の顧問、特任編集を任じる。郭沫若と面識を持つ」<sup>④</sup>（図3）とある。

1936年11月4日に行われた『書苑』発刊発表会に郭沫若、河井荃廬とともに錢瘦鐵も参加していることから、自筆原稿の記述は1936年の記憶違いと考えられる。この時の錢は郭との出会いが、その後の運命を大きく変えることになるとは想像していなかつたであろう。

<sup>①</sup>張煒羽「近代海上研究系列之廿三—鄧齋主人金祖同」『海上印社』2022年第1、2期合刊、19頁。

<sup>②</sup>1946年9月12日郭沫若宛宋慶齡書簡。

<sup>③</sup>丸山昇「解説」、小野忍、丸山昇 訳『郭沫若自伝 5』平凡社、1971年、288頁。

<sup>④</sup>原文「一九三七年移據東京任三省堂出版『書苑』雑誌顧問特約撰述。相識郭沫若。」、錢瘦鐵自筆原稿。

自筆原稿には1931年に東北義勇軍の援助をしていた朱慶瀾（1874–1941）に依頼され三友善会を組織、同会の総幹事を任じたことが最初の政治活動だと記している。<sup>①</sup>（図4）諜報活動については「（一九三七年）王亢生偽參事と面識を持つ。彼は私を煩わし情報を得ようとし、私の寓居を日本人との面会場所として利用した」<sup>②</sup>と記している。あまり積極的ではなかったようだ。

盧溝橋事件発生直後の7月15日、市川の郭沫若宅を訪ねた金祖同は郭に帰国を勧めるとともに、帰国の手配役として錢瘦鐵を推薦した。

### 3、錢瘦鐵の検挙

郭沫若帰国後の錢瘦鐵について記していく。1937年7月25日に「郭沫若を守り帰国」<sup>③</sup>させた錢は同年8月10日に逮捕され、1941年5月まで収監される。

錢瘦鐵の検挙理由は「被告人錢匣に対する治安維持法違反事件等豫審終結決定（東京刑事地方裁判所報告）」、内務省警保局編『外事警察概況』収録「人民戦線派の諜報網検挙」に詳しい。

罪状は「治安維持法違反、殺人未遂、公務執行妨害、傷害」の4点である。「治安維持法違反」は郭の帰国支援、人民戦線や左翼作家への資金援助などの5点が挙げられている。錢の自筆原稿にも、「三月、日本共産党党员黒田善次と共に主義者田中忠夫の上海人民戦線への脱出を手伝い、彼らを助けて連絡工作を行った」<sup>④</sup>とあり一致する。

東京地検検事望月武夫も起訴理由について「郭氏関係が主要なものであったがその外に日本のファシズム研究家であり、日本反帝同盟の指導者であるKを中国に潜入させた事実もあり、私は彼を治安維持法違反と殺人未遂罪で起訴した」<sup>⑤</sup>と述べている。Kは黒田善次（本名は青山和夫）の偽名である。

その他の罪状「殺人未遂、公務執行妨害、傷害」は逮捕後に死刑になると思い込んだ錢が取調室において、取り調べ官の頭を灰皿で殴打したことで加わった<sup>⑥</sup>。身の危険を感じて突

<sup>①</sup>錢瘦鐵『自筆原稿』に「朱慶瀾將軍任援助東北義勇軍。委我担任宣傳工作。共同組織三友善会。我任總幹事。…我的政治活動從此開始」。

<sup>②</sup>原文「相識了王亢生偽參事。他相煩我伝教情報、利用我寓所与日本人之会面之所」（錢瘦鐵自筆原稿）。

<sup>③</sup>錢瘦鐵『自筆原稿』に「七月廿五日。掩護郭沫若帰国」とある。

<sup>④</sup>「三月援助日本共産党党员黒田善次和共産主義者田中忠夫脱出日本到上海組織人民戦線事、我贊助他們幫助做聯絡工作」（錢瘦鐵『自筆原稿』）。

<sup>⑤</sup>望月武夫「錢瘦鐵氏のことども」、『法曹』、1965年171号、31頁。

<sup>⑥</sup>参考文献懇談会編『複製版思想月報 昭和前期思想資料第一期』、文生書院、1974年、12—22頁。

発的にとった行為だったのかもしれない。青山和夫は当時の錢について「芸術家特有の大胆さと封建的だが愛国の激情がほとばしって」<sup>①</sup>いたと述べており、激しい性格が浮かび上がる。

「人民戦線派の諜報網検挙」には当時、錢とともに検挙された人たちの名が記されている。錢の他には陳文瀾（文瀾日語学院経営者）、佐藤正三郎（貿易商）、田中忠夫（著述業）、今関寿麿（著述業）、藤原豊三郎（眼科医）、廣田義夫（学藝社主幹）、岡部信次（著述業）、野見晴夫（著述業）、佐野袈裟美（著述業）、小川茂辰（無職）とある。

錢瘦鉄はこれらの活動家と連絡を取り諜報活動を行い<sup>②</sup>、許世英から「月百円の支出を受け」<sup>③</sup>情報収集を命じられていた。

#### 4、獄中における書画篆刻活動

青山和夫は戦後、錢瘦鉄とともに検挙された人たちのその後を回想している。「佐野袈裟美は検挙、収監後、よほど激しい取り調べとひどい取り扱いをうけたとみえ、仮釈放された時はもう廃人になっていたが、間もなく死亡した……小川水明は刑務所を出てから…奥さんと精神的にも感情的にも不和となり、遂に愛人と心中してしまった。……市川の藤原だけは警察に引っぱられたが、そのまま釈放され東方会等に入り完全な右翼となって終戦にいたった。」<sup>④</sup>とそれぞれ悲惨な結末を迎えた。

錢瘦鉄も獄中で「ひどい取り扱い」を受けたと思われるが、他の受刑者よりは優遇されていたようだ。錢の獄中生活を知る資料として、妻張珊等に宛てた手紙約三十通が伝わる。<sup>⑤</sup>（図5）また望月武夫（東京地検検事）「錢瘦鉄氏のことども」、上田操（東京区裁判所監督判事）「名人錢瘦鉄への回顧」の二文は、現在まで語られることのなかった資料である。

望月、上田は、獄中の錢瘦鉄と面会を重ねており、この二文からは錢の獄中生活の様子を知ることができる。

上田操は1938年秋、豊多摩刑務所S所長から、「最近自分の刑務所に収監している支那人がしきりに絵や字を看守たちに描いてくれており、なかなか面白いものがあるように思

<sup>①</sup>青山和夫『謀略熟練工』妙義出版、1957年、30頁。

<sup>②</sup>「田中忠夫、佐藤正三郎、佐野袈裟美等より我国の対支方針、軍の動向、動員派兵の情況其他軍機に関する事項を探知蒐集し之を許大使に内報せり」内務省警保局編『外事警察概況三昭和十二年』、龍溪書舎、1980年、287頁。

<sup>③</sup>内務省警保局編『外事警察概況三 昭和十二年』、287頁。

<sup>④</sup>青山和夫『謀略熟練工』、275-276頁。

<sup>⑤</sup>薛暉、錢晟編『鉄骨丹青——錢瘦鉄紀念文集』、上海社会科学出版社、2019年、260-299頁。

われるから、一度来てみて下さらないか」<sup>①</sup>と誘われ錢瘦鉄と面会した。錢と「支那古来からの絵画のことや篆刻のことを話」<sup>②</sup>し、その後は月に一、二回慰問をした。その時に「当時の法曹某氏から錢瘦鉄に篆刻を頼んでくれと彫刻刀と石とを差し出して依頼されたことがあったので、私はいささか躊躇していると、同氏は「ほんとうの名人というものは、自分の使う刀などで人を傷つけるようなことは絶対にしないものだ」といわれたため、私もころよく承諾してその通りをS所長に伝えて錢瘦鉄に篆刻を依頼したことがあった」<sup>③</sup>と記している。またしばしば獄中から親交のあった會津八一に印を送っており、會津はそれらに批評を書き錢瘦鉄を励まし<sup>④</sup>、また出所後に生活の糧となるよう、錢の刻印を積極的に周囲の人たちに紹介した。

獄中で凶器となり得る篆刻刀の使用を許すとは通常では考えにくい。錢瘦鉄がある程度自由に書画に携わることができ、篆刻まで許可されたのは刑務所関係者や周囲の人々の努力と彼らの中国の文化芸術に対する理解があったからであろう。

### 5、戦後の郭沫若との交流

1941年5月に釈放され帰国した錢瘦鉄は、1946年に占領軍中国駐日本代表団の文化秘書として再来日した。戦後は書画篆刻を専らとし、1956年に上海中国画院の画師となるも、まもなく右派の濡れ衣を着せられる。1961年に右派の容疑が晴れ名誉を回復した。

現在確認できる郭沫若と錢瘦鉄の再会は1962年夏のことである。この年、郭沫若是錢に書を贈っている（図6）。内容は「喜見木綿花放蕊、水田初稻已分秧。沿途乳犢雄于虎、玉宇無垠漲海蒼。」、落款には「近作書奉于瘦鉄同志。一九六二年夏。郭沫若」とある。同年秋に郭は北京で錢の『魯迅故郷攬勝図』（1957年制作、北京魯迅博物館蔵）（図7）に題字を記している。「山水清幽、文章峻峭、人傑地靈、各極其妙、一代宗師、千秋景鑠、美不勝收、入山陰道」、落款には「題錢瘦鉄作『魯迅故郷攬勝図』一九六二年秋、郭沫若」とある。錢は同年7月27日に同作を北京魯迅博物館に寄贈<sup>⑤</sup>しているので、郭が題字を記したのは寄贈後のことであろう。

翌1963年10月国慶節期間に、郭沫若に招かれて錢瘦鉄は北京に至り、郭沫若詩「満江

<sup>①</sup>上田操「名人錢瘦鉄への回顧」、『法曹』、1964年169号、27頁。

<sup>②</sup>上田操「名人錢瘦鉄への回顧」、27頁。

<sup>③</sup>上田操「名人錢瘦鉄への回顧」、28頁。

<sup>④</sup>「これらは錢さんが事に累され獄中に在ったときに特に許されて刀を振つたもので、当時會津先生は一箇の刻が出来るごとに一々その批評を書き送つて、これを鼓舞鞭撻したのだといふ。」大鹿卓「錢瘦鉄氏のこと」、『桃源』1948年、26頁。

<sup>⑤</sup>薛暉、錢晟編『鐵骨丹青——錢瘦鉄紀念文集』、293頁。

「紅讀毛主席詩詞」を書写、また「鼎堂」朱文印、「郭沫若」白文印（図8）を刻した。同印は二人の合作として知られる。右派闘争以降、錢瘦鐵が名誉を回復するまでの間、郭沫若と錢の交流は確認できていない。或いは互いの立場を慮って連絡を取らなかつたのだろうか。

#### 四、おわりに

本稿は、郭沫若の帰国に協力した金祖同、錢瘦鐵に焦点を当て、郭との交流や郭帰国後の二人の状況について考察を加えた。

金祖同は若くして学問を治め、日本滞在中は郭沫若に師事し甲骨文を研究、帰国後は出版面から郭の支援をした。錢瘦鐵は芸術家と諜報員としての顔を使い分けながら郭の帰国の際には実務的な手配に尽力した。

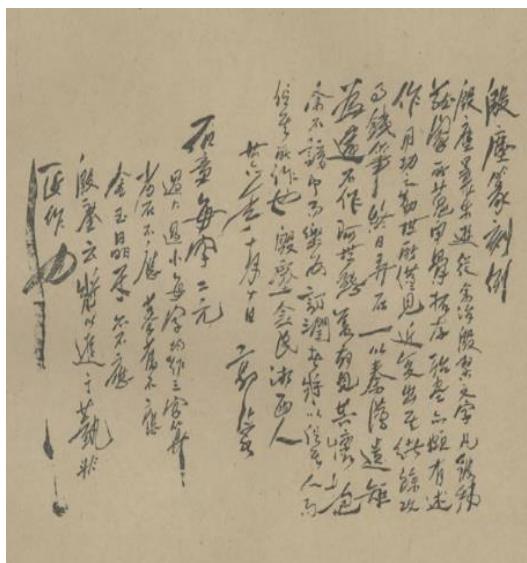
また本稿では錢瘦鐵の逮捕後における刑務所内の生活について、刑務所関係者を含めて「中国の文化藝術への理解」があったこと、それが故に錢は獄中で書画篆刻に従事できたことを指摘した。この点は戦時下における日中文化交流解明の一端となるであろう。今後は1950、60年代の郭沫若と錢瘦鐵の交流について一步進んで検討していきたい。

#### 参考文献

- [1] 青山和夫『謀略熟練工』妙義出版 1957年
- [2] 吉池進『会津八一先生伝』会津八一先生伝刊行会 1963年
- [3] 殷塵著、さねとうけいしゅう訳『郭沫若日本脱出記』第一書房 1979年
- [4] 葉靈鳳『読書隨筆 第三集』三聯書店 1988年
- [5] 黃淳浩編『郭沫若書信集 上』中国社会科学出版社 1992年
- [6] 薛暉、錢晟編『鐵骨丹青——錢瘦鐵紀念文集』上海社会科学出版社 2019年
- [7] 堀川英嗣、浅野泰之、清原健『錢瘦鐵：戦争と芸術のはざまで』藝文書院 2023年

図版

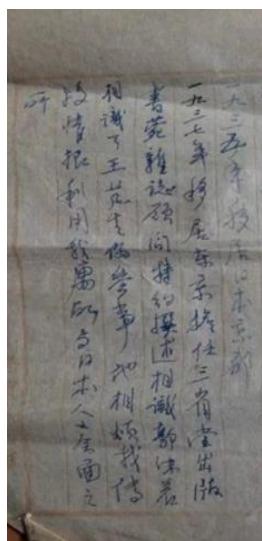
(図 1) 郭沫若『殷墟篆刻例』『説文月刊』1941 年第 3 卷第 2-3 期



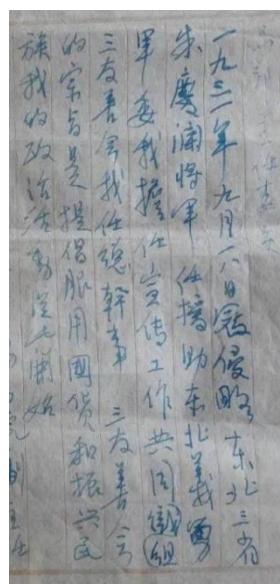
(図 2) 金祖同刻「宋慶齡印」(印面、側款)



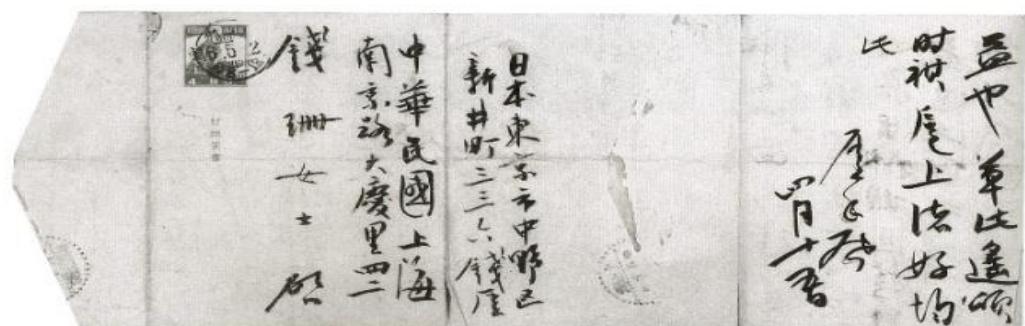
(図 3) 錢瘦鐵自筆原稿『我五十七年以来回憶』、個人藏

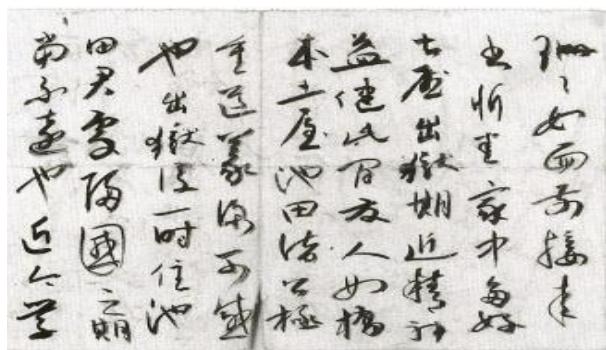


(図4) 錢瘦鉄自筆原稿『我五十七年以來回憶』、個人蔵



(図5) 錢瘦鉄の張珊宛書簡、個人蔵

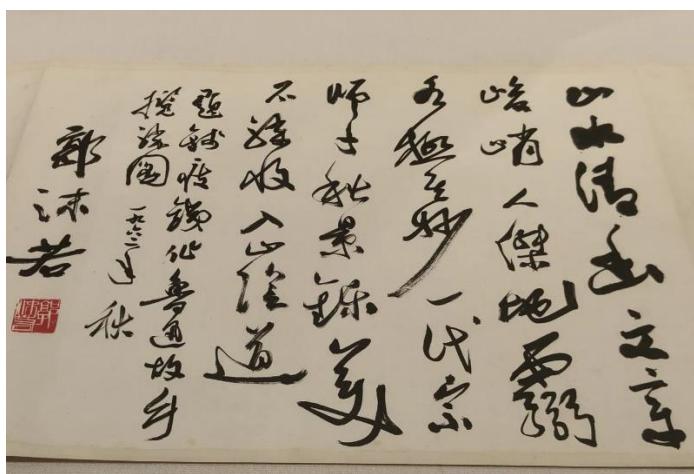




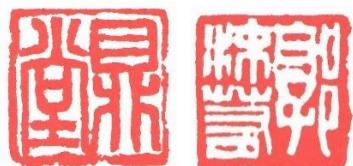
(図6) 郭沫若の錢瘦鉄宛作品



(図7) 郭沫若の錢瘦鉄『魯迅故郷攬勝図』題字、北京魯迅博物館蔵



(図8) 郭沫若印稿、錢瘦鐵刻「鼎堂」朱文印、「郭沫若」白文印



## 郭沫若と内藤湖南 ——中国上古史研究をめぐる親交——

名和悦子

1932（昭和7）年11月7日、一人の若き中国古代史研究者郭沫若が、東洋史学学者内藤湖南の恭仁山荘を訪れ、薰陶を受けたことはあまり知られていない。郭沫若40歳、内藤湖南67歳。湖南は胆石を患い療養中であったが、病躯を押して、郭沫若を歓待している。

内藤湖南（本名虎次郎）は1866（慶応2）年8月南部藩領鹿角地方の毛馬内（現秋田県十和田町）に生をうけた。内藤家は漢学者の家柄で、湖南は幼少時から漢学の素養を受けている。1885年秋田師範学校高等師範科卒業、小学校教員に就く。1887年東京に出ると大内青巒主宰の雑誌『明教新誌』を手伝い、執筆活動を開始する。その後『台灣日報』『万朝報』『大阪朝日新聞』など、記者として時事評論を専門に論陣を張る（1）。

1899（明治32）年『万朝報』から派遣され、約三ヶ月北清地方から浙江、武漢地方を遊歴し、文廷式、羅振玉、嚴復、王修植、方若、陳錦濤、將國亮などと筆談を交わし、上海では再会した羅振玉と金石拓本について評論し、張元濟、劉學詢と事務を論じた（2）。

1902（明治35）年『大阪朝日新聞』から派遣され、時局に備えるため満州地方を視察し、江浙各地を巡歴している。奉天では奉天学府教授王者聲の案内で、清朝初期の滿蒙文藏經を見、清朝の歴史研究に芽生える（3）。

1905（明治38）年日露戦争後、外務省から満州軍占領地行政調査を命じられ、嘱託として北清地域に赴く。奉天では崇謨閣の満文老檔、満州実録、清三朝実録、翔鳳閣の蒙古源流等、清朝史や蒙古史に関する資料を発掘し、これら史料が清朝開国時代を知る非常に価値あるものとして、書写或いは撮影した（4）。調査が終了すると外務大臣小村寿太郎に満州に関する日清条約交渉顧問として北京に招請され、交渉を陰で支えた。

1906年帰国すると、『大阪朝日新聞』を辞職し、当時問題になっていた清韓国境問題「間島問題」に関する文献（韓国承文院文書と奉天で蒐集した文書類）を研究し、参謀本部と外務省に『間島問題調査書』を提出する。日本政府はこの『間島問題調査書』を基に、1909年間島を清国領土と認め、豆満江を国境線に決定する間島協約及び満州五案件協約を調印する（5）。

1907（明治40）年京都帝国大学文科大学に史学科が開設されると、湖南は東洋史学の第一講座に担当教官として招聘され1909（明治42）年文科大学教授に就任する。この年蒐集した貴重な資料を使って清朝初期の歴史研究を本格的に開始した。その成果として発表したのが、『清朝衰亡論』（1912年）『支那論』（1914年）『新支那論』（1924年）『清朝史通論』（1944年）（6）等などで、辛亥革命後の清朝が抱える政治問題や社会問題の原因と、将来の在り方を示し、日本の支那学（中国学）を確立した。

また中国の上古から清朝まで長い歴史を俯瞰し、宋代から近代が始まるとする時代区分

「唐宋変革論」を『支那論』で打ち出したことでも知られている。更に湖南が日本の史学界に貢献したことを挙げれば、嘗て親交のあった清朝の学者羅振玉や文求堂田中慶太郎から、1909（明治42）年敦煌古書発掘の詳細を知らされ、京都において敦煌学を開いたこと（7）。また1911（大正元）年羅振玉、王国維が辛亥革命を避けて京都に移居した後、『殷墟書契』『考訖』『殷墟書契考訖』を出版したのに触発され、京都大学で東洋史概説として初めて「支那上古史」（8）を講義したことを上げなくてはならない。その他、葉徳輝、劉承幹、藏式毅、袁翼、朱希祖等と互いに著書を恵贈しあい、多くの学者と学術交流を果たしたことも注目しなくてはならない。その一人にここで取り上げる郭沫若がいる。

郭沫若（9）は1892年四川省嘉定府樂山県生まれで、1914年日本に留学し第一高等学校予科を卒業後、1915年岡山第六高等学校、1918年九州帝国大学医学部へと進み、卒業後の1923年帰国し、国民党に入党する。1927年蒋介石と対立し、中国共産党に参加。1928年蒋介石に追われると日本に亡命し、千葉の市川に居を構える。生活が落ち着いた頃、郭沫若是中国上古史研究に没頭し始める。

1930年『中国古代社会研究』を世に出すと、続いて1931年『甲骨文字研究』『殷周青銅器銘文研究』を上海で出版し、田中慶太郎の文求堂から1932年『両周金文辞大系』『金文叢考』『金文餘訖之餘』、1933年『卜辞通纂考訖』『古代銘刻彙考』、1934年『古代銘刻彙考続編』、1935年『両周金文辞大系図録』『青銅器研究要纂』『両周金文辞大系考訖』、1937年『殷契粹編考訖』をそれぞれ出版している。

1937年抗日戦争に加わるため単身帰国すると、翌年国民党政府に参加し、政治活動を再開する。1949（昭和24）年中華人民共和国成立後、政務院副総理、政治協商會議副総理など政府の要職に就く。更に文化教育委員会主任、中国科学院院長としても活躍し、その傍ら古代史研究を再開した。やがて1952年古代史研究者として国際的に認められるようになると、日本では翌年いち早く野原四郎、佐藤武敬、上原淳道が『中国古代の思想家たち』で、郭沫若の『十批判書』を全訳出版した。これにより郭沫若是躍日本の歴史学会で喝采を博すようになる。

しかし先述したように、既に20年前の1932年、郭沫若が日本に亡命中『中国古代社会研究』『甲骨文字研究』『殷周青銅器銘文研究』『両周金文辞大系』『金文叢考』『金文余訖之餘』を刊行し、日本の歴史学界に衝撃を与え、東洋史学界の泰斗内藤湖南を絶賛せしめたことは殆ど知られていない。

本稿は、郭沫若と田中慶太郎の往復書簡『郭沫若致文求堂書簡』1997年（北京文物出版社）（10）、関西大学図書館所蔵「内藤文庫」内藤湖南宛田中慶太郎・郭沫若書簡（非公開、撮影不可。図書館の許可を得た一部分のみ原文翻刻し、要約している）、『内藤湖南全集』（以下『全集』と略）第14巻 神田喜一郎宛内藤湖南書簡（書簡716 1933年）を分析引用し、その経緯を追うとともに、郭沫若と湖南の上古史研究を巡る親交について言及するものである。尚、田中慶太郎宛郭沫若書簡は日本語で、しかも崩し字と変体仮名で書かれている。郭沫若是岡山第六高等学校時代、佐藤富子と結婚している。自然と日本語が流暢になったの

だろう。日本語の授業を受け、試験を日本語で回答することも苦ではなかった。更に長い日本生活で、日本人に手紙を書くすべも身に着けたのであろう。問題は、これら書簡は近代古文書の翻刻に慣れていない研究者には、取り掛かりにくいという難点がある。

さて、郭沫若が 1928（昭和 3）年日本の市川に亡命した頃に戻る。亡命して間もなく、中国古史研究を始め、田中慶太郎を介して東洋文庫の古代史資料調査に着手する。1930（昭和 5）年待望の『中国古代社会研究』を上海聯合書店から発刊すると、左翼作家で中国問題研究会を主宰していた藤枝丈夫に原書の第 2 版を贈呈した。藤枝は早速翻訳に取り掛かり、翌昭和 6 年 12 月『支那古代社会史論』を内外社から出版している。藤枝は「訳序に代へて」で、郭沫若が「具体的な資料を縦横に駆使して、考証に最も精密でありながら、しかし単なる『訓古学』的研究に墮していない」、全体的特質として「エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』の続編として成立している、と高い評価を与えていた（11）。この二つの著書が、当時東洋史学界に大きな影響を与えたであろうことは想像できる。

郭沫若は古代史の資料調査対象として、東洋文庫の古代史関係図書や、殷の甲骨文字を研究した羅振玉の『殷虚書契』を選んだ。しかし『殷虚書契』は前編を岡山第六高等学校時代岡山図書館で目録を見ただけで、上野図書館で借り出したものは拓本で解説がなかった。そこで北京の燕京大学で古文字を教えていた教授容庚に『殷墟書契』『新獲卜辞写本』など資料提供を依頼し、研究を続けた。しかしそれだけでは次第に物足りなさを覚えるようになり、遂に京都帝国大学所蔵の中国古代史資料を調査し、京都東方文化学院京都研究所員達と論議を交わしたいと切願するようになる。思い立った郭沫若は文求堂の田中慶太郎に相談し、京都側と交渉し、訪問許可を得るよう依頼する。田中は旧知の松浦嘉三郎に郭沫若の京都行を相談し、松浦は恩師内藤湖南にその旨を伝えたであろう。

1932 年（昭和 7）年 10 月 27 日、郭沫若が田中に宛てた書簡には、京都行がほぼ固まつたこと、田中の次男震二に同行を希望していることが記されている。

「京都有意一行能得震二君同伴固妙不能亦擬独往」（訳　震二君が京都行に同伴できなければ、私一人で行くことになる。）

（『郭沫若致文求堂書簡』44 10 月 27 日）

出発が近づいた 10 月 31 日田中は湖南に宛て

「郭氏卜辞選釈著述に志し、既刊書籍の外、甲骨収蔵家のもの拝見致度存念にて、東京のものは略ほ相済申候付、更に京大等のもの拝見希望」しており、「已に松浦氏を介して承諾を得申候付」、多分明日頃到着と思う。「先生御所蔵のものも拝見仕度」、御病後とは思いますが、「右拝見御許し被下度、奉懇願候」、「可成は私又は震兒同行致候つもりに御座候、京都にて令息にご都合御伺申上候」、おそらく三、四日頃推参できると思ひますので、宜しくお願ひ申し上げます。　不宜

慶再拝　十月三一日

内藤先生　侍曹

（関西大学図書館所蔵「内藤文庫」17 8075）

湖南に郭沫若のことを仲介した松浦嘉三郎は、当時京都東方文化学院京都研究所員で大谷大学東洋史講座を担当しており、湖南の愛弟子でもあった。京都行は田中慶太郎か次男震二が付き添う予定であったが、震二は同行をためらっていたらしい。郭沫若は田中に宛て「震二君様余り行きたくないのを無理に同伴させて戴く事は余りにお気の毒ですから、可成震二様の御自由意志にして戴く様お願い申し上げます」十一月一日（原文翻刻）

（『郭沫若致文求堂書簡』47）

と書き送っている。

結局郭沫若は震二と共に11月6日京都へ立つ。千葉の市川から京都まで汽車で約9時間、まる一日かかって到着したであろう。郭沫若にとって残念なのは、この日湖南は三男戊申や梅原末治ら東方文化学院京都研究所の研究員を伴って、大阪の古美術蒐集家黒川幸七の兵庫県御影町にあった別荘「飛香館」を訪れ、黒川が蒐集した青銅器などの資料を調査しており、郭沫若は絶好の機会を逃してしまったのである。

翌7日、郭沫若は震二と京大を訪問。湖南は京大所蔵の甲骨資料を見せ、学内施設を案内し、中国史に関わる同僚や学生貝塚茂樹、更に東洋文化学院京都研究所で水野清一、梅原末治を紹介した。貝塚は郭沫若の著書四作を全て購入しており、新書『両周金文辞大系』にサインしてもらったという（12）。

午後には恭仁山荘にも招待し、手を引いて書庫に案内し、長年愛蔵してきた稀観本を惜しげもなく披露し見せた。両者論を交わすうちに、おそらく郭沫若は次のような自論を滔々と論じたと思われる。即ち、

羅振玉や王国維の金文や殷墟の甲骨文字研究を、支那古代史を捉える確実な基本資料とみなし、その上でエンゲルスの唯物論（「家族・私有財産・国家の起源」）を援用すれば、殷代の社会的基礎としての生産状態がわかる。殷代は牧畜から農業に推移しており、又氏族社会から奴隸制国家へと転換する一種の革命的時代が認められる。それは商書の中からもその証左を探し出せる、と（13）。

一方湖南は、嘗て大正6（1917）年「支那上古の社会状態」（朝日新聞社講演）をなすと、その頃京大で尚書を駆使し「支那上古史」を講義している。更に大正10（1921）年「殷墟に就て」（『考古学雑誌』第12巻第1号）を発表。湖南によれば、羅振玉と王国維の殷墟出土の甲骨文字研究には、卜辞の多くは祭、告、享、出入、田獵、征伐、年、風雨の12種に分類されているという。これらにより当時の礼俗、官制などがわかるが、今後考古学者により遺物が発掘され、専門研究が進めば、「支那の古代の眞の歴史が始めて分明になり得るであろう。我々の時代に於いて願くば此の希望に達したいものであると思う」（14）と結んでいく。湖南は自分の研究が未完成であると認識しており、後世の研究者のために道を開き、更なる研究発展のため、協力を惜しまない覚悟であった。

それから10年後、郭沫若が湖南の前に期待に副う若者として現れた時、欣喜雀躍したであろうことは想像できる。湖南の期待に背くことなく、滔々と自論を繰りかえす郭沫若。湖南はこのような若者を、特に学歴にとらわれず自己の歴史観を積み上げる在野の研究者を、

喜んで迎え入れ、生涯指導し補佐することを無上の喜びとしてきた。

郭沫若が京都を去った8日、湖南は先に訪れた黒川に札状を認め、

「拝啓 一昨日は真に久々振にて拝芝、御珍蔵品ゆるゆる拝見、梅原氏始め京都研究所員の満足も思ひやられ、且つ三男戊申まで御相伴之榮ヲ得、いろいろ御造作かけ奉り、とも御礼の申上候やうも無之候、(略)近頃ハ梅原君以下、その道精通の人々も多くなり、いづれ近々細密の研究に入り可申存候間、何卒将来とも同君等の希望御許容被下候やう併て奉願上候、尚金文の方ハ三男も目下講読中に候間、是又近々御世話願上度、例の支那人郭沫若氏甲骨研究之件も願上申度候(略)」(傍線筆者)(15)。

と郭沫若援助を依頼している。文面から恐らく黒川に、郭沫若が既に『中国古代社会研究』『甲骨文字研究』『殷周青銅器銘文研究』『両周金文辞大系』『金文叢考』を出版し、6日発刊した『金文餘釈之餘』を携えて京都にやってくることも話題に上げたであろう。もし郭沫若が望めば資料を是非見せてやって欲しいと依頼している。

さて、郭沫若是汽車に乗って千葉の市川に戻る途中、文求堂の田中を訪れ、興奮冷めやらぬ様子で京都の感想を報告したらしく、翌9日田中から湖南に宛てた札状には、

「過日は郭氏震児を随へ推参被致候処、御厚遇を受け居候由、昨日帰途當方へ立よられ委細承り申候、京都にて松浦氏及令息御厄介に嘉申上感謝致し居られ候、私よりも厚く御礼申上度如此御座候」(原文翻刻)

(関西大学図書館所蔵「内藤文庫」17 8076)

と、深謝している。

郭沫若是帰宅した夜、湖南の歓待に応えるべく長文の献詩「訪恭仁山荘寄呈 内藤湖南博士」を詠んだが、湖南の住所を知らなかった。そこで田中に書簡を送り、転送してほしいと書き添えている。

「子祥老兄先生

此次入洛諸蒙推援、並得震弟陪遊數日、謝甚謝甚。昨夜作「訪恭仁山荘」一首、欲寄内藤湖南博士、但博士住趾未悉、今將該詩先呈老兄一閱、如字句間有欠妥處、煩即代為更正伝寄為禱。

本擬走候、因昨夜受寒不能也、此請刻安」

(『郭沫若致文求堂書簡』48 11月9日51頁)

11月10日田中は早速郭沫若の献詩「訪恭仁山荘」を同封し、湖南に送っている。

「今郭氏より來書、別紙詩一首相寄致し呉るゝ様申来候(御住址を記憶せざる為にて)付早速差出申候」

以下は郭沫若の献詩であるが、非公開のため、前文の要約と、後文の翻刻のみ紹介する。

私は「海東之学翁號湖南」を訪れ、志は「天地泰教」を為す。嘗て羅振玉と王国維が先生に私淑したが、特に觀堂(王国維)先生は湖南先生を師と仰ぎ「侍談不覺時限久」であった。私が初めて山荘を見上げた時、人が山麓に建つ「白亜之幽居」を指さして、あれが先生の書庫だと教えてくれた。山荘を訪れ来意を告げ、「卜辭選釈」を論稿中と告

げると、「先生離座出古<sup>(ママ)</sup>貫先、  
以親手為拓施殷墟書契等連城聞我無書、  
即見賜集古遺文有拓景期於江戸医以示文更、  
開書庫出奇籍宋刻唐鈔紛羅繹自慚所學未及、  
此如入寶山空舌昨鳴呼先生待我如此厚安、  
導席前效奔走死生已是等浮雲」

時既に日暮れに迫り、帰り道は更に模糊とし一人離れる。見上げれば「夫子宅使覺路崎嶇」。

一九三二年一一月八日夜 郭沫若待正筆

(関西大学図書館所蔵「内藤文庫」17 8077)

郭沫若が終句に「崎嶇」を書き添えたのは、湖南に対する敬意をこめた一句であったろう。古来陶潛や王安石が詩文の終句によくこの「崎嶇」引用している。王安石は「祭歐陽文忠公文」のなかで、「上下往復感世路之崎嶇」と詠み、これまでの人生を振り返り、また壮大な希望に燃えて世間に立ち向かって行こうと考えると困難な事ばかりと嘆いている。郭沫若是この王安石の一句を意識し、自分は果たして日本の東洋史の泰斗湖南を将来越えることができるだろうか、先生の山荘を振り返り仰ぎ見れば、この道もまた険しいことを諭しているようだ、と思い倦ねたであろう。今後どうすべきか、悶々としながら夕闇迫る山道を下つたと思われる。

12月2日、田中は湖南に、郭沫若が必至で論文作成に励んでいる状況を伝えている。

「郭氏卜辭選釈に没頭居るものか、暫く見不申候」

(関西大学図書館所蔵「内藤文庫」17 8081)

湖南は郭沫若の唯物論に基づいた史論に驚愕すると同時に、脅威を感じたのか、翌1933年3月台湾にいた台北帝国大学助教授神田喜一郎宛の書簡で、

「我邦の小学も稟齋時代後汚下になるばかりにて近頃は金文研究なども弱輩の郭沫若などに辟易致居るやうの始末故聊か年よりの冷水を試み候次第何卒御奮励願はしく候折角近頃本国人の先頭に立つやうに相成候支那学を彼等に追され候やうに致度なきものと存候」

(『全集』第14巻 書簡716)

と書き送っている。湖南は、日本の古代史研究が江戸時代末期の訓詁学者狩谷稟齋以降、進歩していないことを嘆き、やっと本場中国の歴史学者の上を行きたかったと思ったのに、郭沫若の登場で追い越されるかもしれないと内心焦っている。それゆえ神田に向か、今後は日本の支那学発展にどうか尽力してほしい、と切願している。

この頃湖南を悩ませていたのは持病の胆石の副作用で、屡々微熱を発し、月の七八分は暮中で布団から起き上がれなかった。

9月1日田中慶太郎に宛て、

「送上候書契続篇は小生より郭君へ進上致度差出候間何卒御序左様御取計願上候」

と後進に対する配慮を見せていく。

湖南は翌9年2月京大病院で胃癌と診断されたが、6月死去するまで本人に伏せられた。

郭沫若はその後中国古代史研究に力を注ぎ、1952（昭和27）年遂に日本の歴史学界で注目を浴びるようになる。20数年前、湖南がまだ生存していたら、郭沫若について絶賛する一文を残したであろう。さすれば日本で郭沫若に対する評価はもっと早く高く評価されたことであろう。

1955（昭和30）年郭沫若は中国科学大表団を率いて来日した時、京都に立ち寄り、京都鹿ヶ谷法然院にある湖南の墓参りをしている。墓前で、郭沫若は果たして何を思い至ったであろうか。

## 註

- (1) 内藤湖南については、『全集』第1～14巻 筑摩書房 1970年。  
J. A. フォーゲル・訳井上裕正『内藤湖南 ポリティックスとシノロジー』平凡社  
1989年。  
内藤湖南研究会『内藤湖南の世界 アジア再生の思想』河合出版 2001年参照。
- (2) 旅行記「己亥鴻爪記略」『全集』第6巻 327～347頁。  
「燕山楚水 禹域鴻爪記」『全集』第2巻 19～109頁。
- (3) 「游清記」『全集』第4巻 324～353頁。  
「游清記別記」第4巻 354～363頁。  
「游清雜信」第4巻 364～370頁。  
旅行記「禹域鴻爪後記」『全集』第6巻 348～368頁。
- (4) 旅行記「游清第三記」『全集』第669～392頁。
- (5) 「間島問題」については拙著『内藤湖南の国境領土論再考 二〇世紀初頭の清韓国境問題「間島問題」を通して』汲古書院 2012年を参照されたい。
- (6) 『清朝衰亡論』(1912年)『全集』第5巻 187～290頁。  
『支那論』(1914年)『全集』第5巻 291～482頁。  
『新支那論』(1924年)『全集』第5巻 483～543頁。  
『清朝史通論』(1944年)『全集』第8巻 263～490頁。
- (7) 「目睹書譚 敦煌発掘の古書」『全集』第12巻 177～187頁。  
「同 清国派遣教授学術視察報告」『全集』第12巻 188～211頁。  
「同 西本願寺の発掘物」『全集』第12巻 212～221頁。  
「同 欧州にて見たる東洋学資料」『全集』第12巻 222～233頁。
- (8) 「支那上古史」『全集』第10巻 1～239頁。
- (9) 郭沫若については、小野忍・丸山昇訳『郭沫若自伝』1～5 東洋文庫 平凡社  
1971年。郭沫若『郭沫若選集』郭沫若選集刊行委員会 雄輝社 1986年参照。

- (10) 伊藤虎丸「増井経夫氏所蔵 郭沫若致文求堂田中慶太郎 書簡刊印縁起 付田中慶太郎関係資料目録初稿」『東京女子大学比較文化研究所紀要』53巻 1993年。  
『郭沫若致文求堂書簡』文物出版社 1997年。
- 李慶国「郭沫若と文求堂主人田中慶太郎——重ねて『郭沫若致文求堂書簡』の誤りを訂正する——」『史学雑誌』115(8) 2006年。
- (11) 藤枝丈夫『支那古代社会史論』「訳に代へて」1~4頁 内外社 1931年。
- (12) 郭沫若の京都調査旅行については、郭沫若学会会長藤田梨那教授から、斎藤孝治著『シユトウルム ウント ドランク|疾風怒濤|』上、下 シュトゥルム・ウント・ドランク編集出版委員会 2005年を恵贈頂いたので参考にした。ここに深く謝意を表します。
- (13) 藤枝前掲書「第二篇 詩經及び書經時代の社会変革とその思想上における変革」「第一期 原始共産制より奴隸制への推移」243頁。
- (14) 「支那上古の社会状態」『全集』第8巻 7~30頁。  
「殷墟に就て」『全集』第8巻 31~37頁。
- (15) 紀要『古文化研究』7号 2008年 黒川古文化研究所 川見典久「資料紹介 二代目黒川幸七に関する書簡」19昭和7年11月8日 内藤虎次郎(湖南)書簡 115頁。

# 辛字の記憶—聖俗の両義と制度への展開とその風景 源泉としての郭沫若が提起した思想と客觀性を巡って

松宮貴之

## はじめに

郭沫若是、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』、奴隸制の研究に於ける世界的權威、イングラム『奴隸制度と農奴制度の歴史』の附録に論及し、郭説の当時の研究性質はエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』の続編に当たると明言し、さらに唯物弁証法的觀念に拠ると宣言した。

そして、その一環としての卜辭研究の中で、中国に於ける殷代の奴隸制の發見に至るのであるが、その思想を背景として文字考証、その研究に、一九二九年八月脱稿の『甲骨文字研究』がある<sup>i</sup>。

その中で、甲骨文中の「辛」字について、

辛辛本為剗刷，其所有転為愆辜之意者，亦有可說。蓋古人于異族之俘虜或同族中之有罪而不至于死者，每黥其額而奴使之。

(辛辛は、もともと曲がった刀、曲がった鑿の意味で、転じて罪人の意とも説明できる。多分古人は異族の俘虜あるいは同族中の罪人を殺さないで、常に額に入れ墨して奴隸としたのである。)

とし、さらに同じく同年の書『支那古代社会史論』「「卜辭」を通して見たる古代社會」〈奴隸の用途について〉の中で、<sup>ii</sup>

用途の一—雜事に使役する。これは、僕といふ字の字形そのものが最も明瞭に表現して



ゐる。甲骨文字の僕の字は である、全體の形は立つてゐる人の側面に象つてゐる。[これを仔細に點検すると]頭の上に 辛 [痛苦・罪の義あり] を載せてゐるが、これは天 [頭部に入墨する刑] であり 點 [面部に入墨する刑] である。面部に入墨するといふ形を表示することが出来ないために、點を施すための刑具をもつてこれを表示したのである。辛とは、取りも直さず、古代の剗刷 [剗は曲刀・刷は曲鑿で孰れも彫り物に用ふるもの] である。…さて、右の人形は頭部に點されて居ることが判つた。更に臀部に尾の形があり、手に捧げ持つてゐるものは、掃除の結果棄つべき物(箕)の中に塵埃を盛つた形)である。さすれば、僕なるものが、古人によつて、掃除などの賤役を受け持つものとして使役されてゐたことを知り得るわけである。

と解釈した。

ここで、郭は、

・罪人

・戦争捕虜

### ・家内制奴隸(労働)

と入れ墨を入れた対象関係を定位した。

しかしその客觀性については、未だいくつかの課題が残されている。

先ず甲骨文の「辛」字の用例は、専ら十干として用いられ、入れ墨を直接表す用例は、存在しないこと。また落合淳思氏は『甲骨文字辞典』において「辛」「辛」字源に於いて敢えて「工具」までに認識を抑え、入れ墨にまで言及されていない<sup>iii</sup>。

敢えて甲骨文中の墨刑と「辛」字の関係があるとすれば、屯一一二二に<sup>iv</sup>

辛伊尹、眾酒十一羊。

の祭祀を表す用例があり、墨刑と祭祀との関係があるとすれば、その可能性は指摘できる程度に止まるであろう。

郭が、辛字入れ墨説の例証に挙げた僕や、またそれに連なる妾、童の上部のカタチも、今は、于省吾の「冠り」のカタチという説が、日本では主流になっている。

### 入れ墨と×と罰—聖俗の表裏

現在までの甲骨文字研究史に於いて、入れ墨に関する文字として、辛系(郭沫若説)を嚆矢に、×系(白川静・落合淳思説)、黒系(唐蘭説)の三系統が主流であろうが、その中で最も蓋然性が高いとされる文字系列は、×系(文・爽等)であろう。

その入れ墨の象徴たる×・+、つまり交差は集積され、漢字という表象に呑み込まれる。

想像を逞しくすれば、古代中国の原住民の男性は、異族、敵族の首を狩ること(殺戮)によって、成人と認められ、×〈罰の施行〉、その表象たる入れ墨が許され、死後、同族の極楽の他界が保証されたのだろう。つまり入れ墨は、種族への帰属が許された誇り、その証であり、中国の家族主義、血脉信仰に繋がっている。

そこから派生して、呪術、まじないの意味となり、さらに女性も身籠れる齢になると、異族に捕らわれ奴隸にされる前に、辛(針)によって×が施され、祖先に守護される儀式ともなったと考えられる。

またそれが通過儀礼化し、子供が生まれると守護の意味を込め、額に×が筆書される習俗(産字)となる。祖先に護ってもらうためである。

逆に辛字に代表されるように異族に捕らえられ俘虜となり、敵族の入れ墨を施されることは、魂が異族の靈に乗っ取られ、憑依されることになって、異族の他界に奴隸として仕える表象とされ、それが、墨刑(黥)の原初的な意味なのかもしれない。

### ×と結び—大自然への組み込みと制度化

例えば、この×の呪いは、日本の銅鐸にも見られる「×(交差)」や「結び」のような線刻にも確認でき、考古学的に重要な意味を持つと考えられている。

主な意味合いは、交差や結び、生命の循環、そして「再生」の意味合いが強く込められているとされ、靈魂の捕捉・緊縛、銅鐸の主要な文様である「袈裟襷文」や「流水文」

は、稻の靈（稻魂）をその場に結びとめる（緊縛する）機能を持っていたと考えられ、これは、豊作を願う農耕祭祀の工具として使われていたことに関連する。

また魔除けの 鋸齒文などが靈魂の遊離を阻止する機能を持っていたとする説もあり、特定の文様が靈的な力を制御する役割を担っていた可能性がある。

これらの文様は、日本では弥生時代の人々が銅鐸を単なる楽器としてだけでなく、豊穣を祈り、共同体の安寧を願うための祭祀具として重要視していたことを示している。

つまり、日本で×形は、聖的な表象として、受容されていた蓋然性が高いと言えるだろう。

### 結びと辛の呪縛—ムスピの関係性

ところで、結びについて、あの宗教学者ミルチア・エリアーデは、広くインド=ヨーロッパの宗教の中に、「呪力」を「呪縛」とみなし、人間を加護し、また逆にそれを脅す超自然の力を「紐」や「綱」に表徴させる思想と考え、「綱と結び目は人に憑きもするが、憑きから祓いもするのだ」と述べている。

文身と書いてイレズミとよむが、縄文はまさしく土器や土偶に刻まれたイレズミにも似た存在であり、イレズミをした縄文人は多かったと想像される。

「縄の文学」—土に表現された縄文人の精神世界のアヤ（文）にはそれぞれの地域固有の様式がある。

その結びの正負の両義は、ムスピの主体性と強要性、帰属と隸属（呪縛）、さらに辛という「結びの工具」の多面的な意味を問い合わせることによってのみ、可能だと考えられる。

### 戦争と罰と辛に取り憑かれた俘虜—南方文化と南字の検証

以上を踏まえ、次に正負の負の意味の入れ墨。呪い、呪縛の文脈として検証するために、古代中国に於ける刑罰の実相を分析しなければならない。

そもそも刑罰とは、罪を犯したものに加える制裁であることは言を俟たないが、それは歴史的に形成されたものであり、「罪」という観念自体、その背景となる文化、時代によって多くの分類がなされるべきであろう<sup>v</sup>。

そもそも刑罰とは、一つの共同体という認識を前提として存在するものであり、それが他の民族に施行される場合は「実力制裁」、いわゆる「戦争」という状況が想定される。

また特に中国王朝時代にあっては「王」に対する咎がそのまま刑罰の対象になることを忘れてはならないだろう。

つまり、【罰・伐（戦争）・撥（撃鼓）・抜（城を抜く）〈バツ〉】は、すべて×（入れ墨）から派生した単語家族と考えられないだろうか。

例えば、雲南の貯貝器中央の柱状に重ねられた銅鼓は、無論、祭祀の対象ではない。人間を殺して祭った対象は無形の神鬼であり、銅鼓は神に祈りを通じさせるための一種の道具と解釈すべきであろう。

現代のワ族（雲南の少数民族）の間では、神鬼をまつる時には木鼓を打ち叩き、木鼓の靈

の助けを借りることが必要であり、そうすることによって、天の神ははじめて人々が祭りをおこなっていることを知るのである。銅鼓の役割も、木鼓と同じであったのだろう。

その青銅器上の人頭祭(人身供犠・入れ墨人形)、首狩りの目的は、獲物の血の呪力によつて、作物の豊穣を祈る儀礼的狩猟の習俗であり、本来山地斜面の焼畑の慣行と結び付き伝承されてきた。

またワ族の木鼓は女性の生殖器の隠喩であり、母親の象徴である。木鼓を祭ることによつて、類感呪術的に作物の豊作と安泰、子孫繁栄が信じられた。ならば、鼓を男根の隠喩と考えられる<sup>ばち</sup>撥で伐つ行為が、そのまま「まぐわい」を意味し、更には戦争による多産豊饒に繋がるのではないか。

つまり、人頭祭(伐・戦争)、鼓、多産豊饒は、やはり意味的に一つのグループとして考えられ、それが、×、バチ思想に包括される。

また甲骨文の南字は、楽器の象形で、銅鼓。旧く苗族が用いた。懸繫して上面を鼓ち、器は底がなく、左右の頸部に鑲耳があり、そこに紐を通して上に懸けると、「南」の字形になる<sup>vi</sup>。

卜辞第一期、武丁期の貞人に殷という貞人があり、その由来が知れる。またその用例として、殷王朝によって捕虜や奴隸にされており、主に祭祀犠牲として記される。

また中国での人身供犠は、「食」と「焚焼」と結び付き、殷代に於いて、自民族以外の供犠に用いられる異族は、動物同然の認識だったことにも留意しなければならないだろう。

### 習俗から刑罰制度への分岐

甲骨文の南字は、先にも触れたが、卜辞第一期、武丁期の貞人に殷という貞人があり、その由来が知れる。またその用例として、殷王朝によって捕虜や奴隸にされており、主に祭祀犠牲として記される。

おそらく原初的に入れ墨は、人骨を燃焼する際の煤(墨)を用い、魂の再生(自族・異族〈支配〉)を寓意したのではなかろうか。<sup>vii</sup>

これは、敵族を自民族として再生する文脈で、郭説の戦争俘虜に入れ墨をという説と符合する。例えば、あの秦末から前漢初期にかけての戦士・黥布も、やはり入れ墨をしていたのではなかろうか。

つまり、入れ墨は、初期の宗教性から、制度としての奴隸制に移行したという変遷は、やはり蓋然性の高い説と言える。

入れ墨は、宗教性から派生し、人身供犠を経て、戦争俘虜(罪人)に制度として派生したのでは、あるまいか。

例えば、旧中国、清朝には、奴隸や家内制奴隸の身分を示すための公的な入れ墨制度は存在しないが、刑罰(この場合、倫理的犯罪者)としての入れ墨(墨刑)は存在した。

郭が、実家のある四川で、何か見ていた、知っていた可能性も否定は、出来ないだろう。

## 小結—奴隸制の問題

郭沫若の殷代の奴隸制社会の根拠となった「衆」字は、昨今の研究で、日本でも淘汰されつつある。

但し、これは奴隸制をどう定義するかという問題とも重なるが、戦争の俘虜や罪人が人身供犠となり、時に身体毀損され、強制労働させられた、所謂「奴隸制」の存在は、否定はできない。

これは、日本語の感性ではなく、中国語の感性で捉えるべきであり、この問題は、郭にとっても、現代的(建国の理念と重なる)問題でもあった。

そういう現代的課題(中国人の民族性)を克服する糸口を探り、郭の「辛」字解釈、文字学は、「説文」以来の呪縛を放ち、殷代の入れ墨をフォーカスした嚆矢であり、それを起点に入れ墨文字学は発展し、私もその恩恵に浴している。

その約2000年続いた董仲舒の天人相関史観(説文)から、郭の科学、習俗を文字学に持ち込んだ革命的貢献は大きいだろう。

郭沫若の入れ墨の一側面から奴隸制認識へと、その学術の新天地を拓いた、突破口的功績は、歴史的な快挙と言わざるえいないと、私は思う。

今回は、×系について少しく言及したが、以前、私は唐蘭説の黒系についても検証したことがある<sup>viii</sup>。

辛系については、現今的情况では、前半で解説したように、新たな着想かエビデンスがなければ、そこからの展開は容易ではない。

但し、おそらく辛字は、元、身体毀損のための様々な工具を包括した概念だろうから、やはり入れ墨用の針でもあったと考えられる故に、今後の郭文字学の蓋然性の更なる検証研究については、しばしお時間を頂きたい。

<sup>i</sup> 郭沫若『甲骨文字研究』(一九七六年 中華書局)

<sup>ii</sup> 郭沫若著・藤枝丈夫訳『支那古代社會史論』(一九三〇年 内外社版)

<sup>iii</sup> 落合淳思『甲骨文字辞典』(二〇一六年 朋友書店)

<sup>iv</sup> 中國社會科學院考古研究所編『小屯南地甲骨』(一九八〇—一九八三 中華書局)

<sup>v</sup> 阿倍謹也『刑吏の社会史—中世ヨーロッパの庶民生活』(中公新書 五一八)

<sup>vi</sup> 郭沫若も『甲骨文字研究』(1931年)の中で、「南」字の字源、古義を樂器と見做している。

<sup>vii</sup> 拙著『ムスピの系譜』(2025年 東峰書房)

<sup>viii</sup> 拙著『入れ墨と漢字』(2021年 雄山閣)

# 关于郭沫若日本亡命之行中事实记载的错误

## —卢山丸的运营公司名称与上海丸启航日期误传应予修正—

岩佐昌暉

### 一、前言

郭沫若及其家人于1928年2月24日为赴日亡命（政治避难）在上海港登上日本客轮离开祖国。关于此事，郭沫若的自传《跨着东海》<sup>1</sup>（以下简称《跨》）记载了事件大体经过，其日记《离沪之前》<sup>2</sup>（以下简称《离》）则记录了出国前的行动轨迹与内心思绪。这些都是研究者不可或缺的参考资料。

现阶段最可靠的郭沫若生平事迹与学术成就综述文献，当属林甘泉、蔡震主编的《郭沫若年谱长编（1892—1978年）》<sup>3</sup>（下称《年谱》）。在记述郭沫若历史的一个转折点的日本亡命之行时，《年谱》自然将其作为无可置疑的事实依据。然而关于其与家人分别搭乘同日离沪赴同一个日本港口的同一个轮船公司的两艘船只的记载，根据当时中日联络船实际运营情况来看难以置信。本报告旨在厘清此问题，并据此要求修正《年谱》的记载。

首先请参阅以下资料。资料1摘录自《离》，资料2摘录自《跨》，均为与本报告相关的段落。

### 二、资料

#### 资料1

二月九日，星期四。

- A) 定十一号出发，心中涌起无尽烦恼。又要踏上漂泊之路，总觉得不安。这一家六口真是够我拖缠。安娜很平静，对她而言不同，这是回她自己的母国。她的太平静，反而增加了我的反抗性懊恼，脑子沉闷得难耐。（294页）
- B) 豪兄不来，一时也不能动身。恐怕十一号不一定能够走成。仿吾说，明早去会梓年，请他告豪（后略）。（294页）

二月十日，星期五，晴。

- C) 豪与民治来访，共进午餐。仿吾亦至，邀初梨等人来谈话。晚间伯奇来访，留仿吾与伯奇在家饮晚酒，颇有醉意。决延期十八号的“加拿大皇后”（294页）

<sup>1</sup> 郭沫若：《海涛集》中的《跨着东海》，《郭沫若全集》第13卷，第305页-341页

<sup>2</sup> 郭沫若：《海涛集》中的《离沪之前》，《郭沫若全集》第13卷，第272页-304页

<sup>3</sup> 林甘泉、蔡震主编《郭沫若年谱长编（1892—1978年）》第1卷，中国社会科学出版社，2017年。与本文相关的是书中1928年2月9日至2月27日（第421-424页）的记载。

二月十六，星期四。

D) 十八号无法启程，改乘二十四号的卢山丸。家眷于同日乘上海丸。（298页）

二月二十三日，星期四。（304页）

E) 船票已全部购妥，决定明日启程，内心异常不安。（中略）当夜与成仿吾同宿日本人经营的八代旅馆，是内山替我们订下的房间。（日记至此中断）（304页）

## 资料2

F) 一家人同船走吧，人太多容易引人注意。若处理不当，在码头便可能被扣留。同船行船不行，

只能分开。我独自乘坐日本邮船前往神户登陆。（315页）

G) 登船日期为二月二十四日。（中略）购票时我使用化名吴诚，冒充南昌大学教授身份。（中略）因此我独自一人待在吴诚的舱房里（中略）整整待了三天。三天后的上午，抵达了神户（315页）

### 三、笔者对资料的思考

资料1·2中，我的问题关切点在于下划线部分。

A) 表明“已将日本亡命启程日定为2月11日”。此阶段郭沫若应计划携全家同乘一船赴日，后文所述，当时日本邮船航线计划中，2月11日从上海启航的赴日船只为“上海丸”。

A) 而此处记载“因豪兄未能前来，故无法立即启程。十一日未必能如期出发”。对此，成仿吾回答道“明日清晨我将拜访梓年，可请他转告豪”。豪系周恩来化名。梓年即潘梓年，当时在中共上海支部文化工作委员会及中国革命互济会（对革命运动中被捕者、牺牲者的救援组织）工作，协助郭沫若流亡应属其职责范畴。由此可见，前年入党的郭沫若是在保持与党联系的前提下实施流亡计划的。所谓“未必能成行”，或许是指需待党的组织联络解决船票安排、官宪动向等问题后方能启程。

B) 可能通过成仿吾联络，10日上午周恩来与李民治前来商讨启程事宜。《年谱长编》编者注称“应是此次周恩来来访，同意了郭沫若一家赴日安排”，可见启程事宜在此正式敲定。而后续“来初梨等人谈话”，我认为可能是讨论自己亡售后创造社的运营事宜。因为自1927年起，创造社因编辑方针及更私人的同人关系、情感隔阂等问题，在郁达夫、郭沫若、成仿吾等成员间产生矛盾，最终导致八月郁达夫与创造社决裂。作为文学团体，创造社正面临解体的危机。同年，受福本主义影响的日本留学生归国后纷纷加入创造社，如冯乃超、李初梨、朱镜我、彭康等人。他们将创造社重建之路定位为从浪漫主义文学转向无产阶级文学。这标志着后期创造社的开端。随之而来的创造社在文坛中的定位问题，迫使郭沫若不得不承担诸多责任。

所谓后期创造社的开端。随之而来的创造社在文坛中的定位问题，迫使郭沫若不得不承担更多困难与烦恼。他召集李初梨等年轻激进派成员，与成仿吾共同进行“谈话”，想必是希望将重建创造社的重任托付给年轻一代。

待他们离去后，郑伯奇前来拜访，便挽留成仿吾共饮。谈话内容想必也大同小异。值得注意的是最后那句“决定延期至十八号的‘坎拿大皇后号’”<sup>4</sup>。这似乎意味着放弃原定次日（11日）启程的日本航线，改乘延期至18日出港的坎拿大皇后号。我认为这应是当天早晨与周恩来等人商议后确定的行程。

- D) 系郭沫若夫妇当日中午在李民治主持的欢送宴席上发表的。文中未说明“18号无法启程”的具体原因。但紧接着写道“改乘廿四号的卢山丸。家眷于同日乘上海丸”，此应为与安娜协商后的决定。郭沫若一家赴日行程虽如宣言所示执行，但此处记载成为后来《年谱长编》等文献中船名及船东公司讹误的根源。日记中虽记载了出席者姓名，此处予以省略。含郭沫若夫妇共十二人。
- E) 处“船票都已经买定了，决定明天走了”的表述，是否意味着他们已持有船票？若果真如此，理应能查明卢山丸所属航运公司，但他对此未作任何记载。
- F) G) 仅记载“日本邮船”而未标注船名。个人推测，他意识到自己搭乘的日本邮船庐山丸这一说法是否存在误差，因而对该表述产生了踌躇。

#### 四、为何探究“卢山丸”的念头

在发表本主题前，我曾研读《郭沫若年谱长编》。该书2月24日条目记载：“化名南昌大学教授，假托赴东京考察教育，乘日本邮船‘卢山丸’赴神”，因此我原以为卢山丸属于日本邮船。另一方面，正是阅读年谱促使我关注中日航线，前已查阅过数本日本出版的中日航线相关著作<sup>5</sup>。然而当时中日航线实为日本邮船垄断，相关文献虽详尽记载邮船运营情况，却无一提及“卢山丸”船名。学术论文亦是如此。于是查阅了《日本邮船百年史》<sup>6</sup>卷末所附的船名一览表，却仍未见其踪影。由此推测，郭沫若所乘的“卢山丸”，或许是将日本邮船旗下另一艘船只的名称误记所致。另一方面，郭沫若曾提及家人搭乘同日启航的“上海丸”，于是又推测：他是否将航行于上海—长崎—神户航线的另一艘“长崎丸”误认作“卢山丸”？但需注意，“上海丸”与“长崎丸”，均为日本

---

<sup>4</sup> 这艘加拿大皇后号实为“RMS 加拿大皇后号”，皇家邮政船（英语：Royal Mail Ship，简称：RMS），是根据合同为英国皇家邮政运输邮件的远洋班轮船只名称前缀。该船由苏格兰费尔菲尔德造船厂于1920年为加拿大太平洋轮船公司（CP）建造，作为定期航线客轮，全长653英尺（199米），注册总吨位21,517吨，属于大型客船。该船以加拿大温哥华港为基地，原计划开辟通往日本、香港及中国的航线。当时它堪称横跨太平洋航线上投入运营的最大型船舶。笔者推测，此次航线应为上海—神户—横滨—温哥华。

<sup>5</sup> 例如：（著作）松浦章《汽船的时代—近代东亚海域》清文堂出版，2013。《汽船的时代与上海航路》清文堂出版，2017等。/冈林隆敏《上海航路的时代—大正·昭和初期的長崎与上海》长崎文献社，2011年。/（论文）松浦章《長崎丸・上海丸的时代—日中汽船航路的新时代》载《或问》第38号、关西大学东西研究所，2020年、等。

<sup>6</sup> 日本经营史研究所编《日本邮船株式会社百年史》日本邮船，1988年。

邮船为击败竞争对手而专门建造的 5200 吨级高速船。我认为绝无可能让同类船舶在同日启航。于是便萌生了深入探究这艘“卢山丸”的念头。

最初藤田会长要求提交研讨会报告题目与概要时，我本打算仅陈述“卢山丸这艘船并不存在于上海至日本的航线上”这一观点。然而实际调查后，我不仅收获了大量新知，更发现这个课题极具趣味性。更重要的是，我意识到自己“卢山丸号不存在于上海至日本航线”的判断存在谬误。

今天我将结合这些发现，简要说明本次报告稿的撰写过程。

## 五、获得松浦章教授的指导

事实上，这份报告是在向藤田先生提交标题与概要后才正式着手撰写的。当时为寻找该领域最具权威的研究者，我研读了多篇关于日中航线的论文与著作。最终发现关西大学名誉教授松浦章先生的研究最为广博深入，遂决定向其请教。幸运的是，我得知研究生时代的朋友—关西大学名誉教授内田庆市先生曾与松浦教授合著专著。经由他的引荐，我得以获得松浦教授的指导。当我通过邮件向内田教授阐述研究思路后，松浦教授立即通过内田先生回复如下：

《经手头资料核查，1928 年时期的卢山丸于 1920 年 10 月在浦贺船坞下水，吨位 2531.05 吨，隶属日清汽船公司，推测可能航行于长江航线、中国内河航线或沿海航线。即便临时投入神户至上海航线运营，这种可能性也无法排除。》

根据这封邮件的线索，查阅日清汽船社史及其他资料后，至少可以明确：卢山丸是日清汽船为开辟上海至广东的新航线而建造的客货两用船，且至少在郭沫若流亡期间始终隶属于日清汽船。因此，所谓“日本邮船的卢山丸”实属谬误，必须修正为“日清汽船的卢山丸”。

此外，针对“运营上海-广东航线的卢山丸号是否实际运行过上海-神户航线”这一问题—即郭沫若是否乘坐名为卢山丸的船舶于 2 月 24 日离港，并在 3 天后抵达神户港—松浦先生提供了如下查证方法：

《建议查阅 1928 年 2 月 10 日至 20 日期间《上海申报》的船舶出港记录（以旧历记载）及神户市立图书馆所藏《神户又新日报》1928 年 2 月 24 日前后刊载的船舶入港报道。》

关于上海《申报》，我最终未能在本报告截止前完成查证<sup>7</sup>；而神户又新日报方面，我于 11 月 1 日从博多直赴神户，在市立中央图书馆查阅了该报实物复印件。经查阅 1928 年 2 月版面，虽

---

<sup>7</sup> 关于《申报》资料，研讨会结束后扬州大学金传胜副教授表示愿意协助，这真是“及时雨”般的提议，我深感感激并立即拜托。随后金老师来函告知，《申报》虽可通过网络查阅，但未能找到卢山丸驶离上海的记录。不过《时事新报》刊登过外国籍船舶驶离上海的广告，经查阅后寄来了当时的出航记录报纸复印件，但仍未发现能佐证卢山丸出航的记录。启航报道通常由船公司支付广告费刊登。关于《申报》一事，研讨会结束后金传胜扬州大学副教授表示愿意协助，这真是“及时雨”般的提议，我深感感激地接受了。随后金老师来函告知，《申报》虽可

有船舶出港记录，却未发现入港记录。此外，出港记录中亦未见“卢山丸”字样。因此未能查证 2 月 27 日卢山丸入港的记录，实属遗憾。估计事实上日清汽船公司本身似乎未向该栏目提交资料。

## 六，日本邮船历史博物馆（副馆长）山田喜之先生

有另一位直接受教于我的恩师，是日本邮船历史博物馆（副馆长）山田喜之先生。因我向日本邮船历史博物馆发送邮件咨询“卢山丸”与“上海丸”相关事宜，由此结缘。山田先生始终以极端认真的态度解答疑问，我们频繁通过邮件往来。正因先生曾任职于日本邮船公司，才得以获得诸多珍贵资料。山田先生最近一封邮件内容如下：

《当时投入“长崎丸”“上海丸”的航线，在时刻表中标注为“上海·长崎·神户线”，本公司英文旅客指南则称作“Japan China Rapid Express Service”。当年 2 月前后船舶调度计划如下：

1月 30 日 上海发 长崎方向（终点长崎） “长崎丸”  
2月 3 日 上海发 经长崎 神户方向 「上海丸」  
2月 11 日 上海发 经长崎 神户方向 「上海丸」  
2月 19 日 上海发 长崎方向（终点长崎） “上海丸”  
2月 24 日 上海发 经长崎 神户方向 「长崎丸」  
3月 2 日 上海出发 经长崎前往神户 「长崎丸」

（该航线原则上投入「长崎丸」「上海丸」两艘船舶，按上海-长崎-神户顺序调配，确保各港口每 4 日一班船。（中略）无论如何，「长崎丸」与「上海丸」同时从上海出港的可能性极低。）》

山田先生好像是作为干部社员长期活跃在日本邮船公司的。他此次提供的信息，从海运现场工作过的人士的视角出发提供的。所以，为解读后文提及的郭沫若 2 月 9 日与 16 日日记提供了关键线索，极具实用的价值。最后，在这两位前辈的指导下，我将阐述自己对该课题的调研思考及最终结论，以此结束今日拙劣的报告。

## 七，结论

---

通过网络查阅，但未发现卢山丸自上海启航的记录。不过《时事新报》同样刊登过外国籍船舶自上海启航的广告，经查证后寄来当时的启航记录报纸复印件，却依然未能找到证实卢山丸启航的依据。启航报道通常由船公司支付广告费刊登。日清汽船公司或许如同《神户又新日报》案例般，并未投放相关广告。虽未找到决定性证据，但金君主动查阅《时事新报》的机敏令我深感钦佩。虽然我的报告涉及的问题很小，但由此契机，我得以与年轻的中国学者开展学术交流。我认为这是迈向重大发展的第一步。他的合作提议令我欣喜万分，深受感动。国际学术会议之所以有意义，正是因为能孕育出这样的交流萌芽。在此特别记录，向金君表达谢意。

卢山丸原为日清汽船公司于1921年10月开通的政府命令航线（该航线受日本政府补贴，规定运营船舶的吨位、航速、数量、单航程天数、停靠港口及月度/年度航行次数，要求执行超出规定次数的定期航行）—上海至广东航线—而建造的两艘客货两用船（即卢山丸、嵩山丸）。自1921年1月投入上海—广东航线运营后，因面临占据市场份额的英国汽船公司竞争，加之中国排日、抗日运动抵制日本军事扩张的影响，经营状况持续低迷。大正末期（1912—1926年）经营已显不善，进入昭和时代（1926—1989年）后几乎处于停航状态。为此，公司自1925年起在大阪—汉口航线投入卢山丸、巴陵丸、金山丸等船舶运营<sup>8</sup>。

日清汽船作为连接日本本土与中国的重要航线，亦开通大阪至汉口航线。自1918年8月起，以单艘汽船每周四班的频率往返大阪与汉口，途中停靠神户、门司、上海等港口。此后因贸易不振，1924年航线缩减为每年一班；1927年受排日运动影响，进一步减至每年一班；至1929年终止运营<sup>9</sup>。

综上所述，郭沫若从上海前往神户时搭乘日清汽船“卢山丸”的推测在历史事实层面具有成立可能性。卢山丸确实存在，但属于日清汽船株式会社而非日本邮船所有。郭沫若笔下的“日本邮船卢山丸”应修正为“日清汽船卢山丸”。虽然如此，依据目前的文字资料来看，我们还不能以百分之百的确率断“郭沫若乘日清汽船的卢山丸赴神户”，只能写《郭沫若赴神户时乘坐的很可能是“日清汽船卢山丸”》。

至于郭沫若日记中“家人乘坐上海丸”的记载，实则亦属谬误。如前文山田先生邮件所示，日本邮船总公司1928年航行计划表显示：二月自上海开往日本的联络船仅有3日、11日、19日、24日四次航次。其中上海丸仅在3日、11日、19日三天启航，24日出港的唯长崎丸一艘。《安娜与孩子们于24日登船并在长崎下船的正是日本邮船的长崎丸。》该船于26日抵达神户港，28日又从神户启航返回上海。

## 八、补充

那么，郭沫若为何会出现这样的错误呢？最后补充一下笔者对这个问题的一个想法。

请回顾日记内容。郭沫若在2月9日写道“决定于11日启程”。如前所述，11日正是上海丸计划离港之日。上海丸此船名与日本邮船公司，他把这两个名词肯定会牢记在心。再加上郭沫若可能并未掌握日本邮船中日联络船队除上海丸外还有长崎丸、两船交替。

<sup>8</sup> 浅居诚一編《日清汽船株式会社三十年史及追补》，1941年。最近松浦章先生对日清汽船公司的事业概要写了一篇论文（《在1930年前后日清汽船公司的船舶航运情况》）发表在《海事史研究》第82号，2025年11月）。该文主要用日清公司昭和初期出版的小册子《日清汽船股份公司航路指南》简介以在掀起反日抗日高潮下的中国社会为背景，该社从开拓大陆沿海的海运的苦斗到随着日本帝国主义侵略的扩大，海运事业急剧恶化的历史。很遗憾松浦先生把论文抽印本寄给我时，我已把稿子交完编辑。没及时拜读论文。拙文不能反映先生的论文的成果。

<sup>9</sup> 中西僚太郎《明治至昭和战前期连接日本本土与中国·台湾的定期航线》《历史人类》51号，2023年。

此外，虽属推测，但这种认知偏差或许另有背景：流亡的大方向由周恩来等干部负责，具体事务（如确定乘船、安排车票等）并非由郭沫若亲自处理，而是由潘梓年等共产党的救援组织代劳，导致他本人并未参与实际准备工作。如上种种条件种种因素叠加之下，郭沫若脑海中或许已形成固定观念：自己乘坐的是廬山丸，家人乘坐的是上海丸，两船皆属日本邮船旗下。

不过，郭沫若在日本流亡期间，很可能已知晓乘坐的船虽属中日联络船，却并非上海丸。因为在《跨着东海》中，他虽详细描述了家人乘船的航线，却唯独未提及船名。在我看来，这似乎是刻意隐瞒船名，但这种猜测是否过于偏颇？

# 武田泰淳『風媒花』における「Q」<sup>1</sup> ——戦後の中国文学研究会と郭沫若——

郭 偉

『風媒花』は武田泰淳の最初の長編小説であり、戦後日本文学の記念碑的作品の一つである。雑誌『群像』(1952年1月～11月号)に連載されたこの作品は、中国文学研究会の主要メンバーとその関係者をモデルとして、戦後日本の知識人群像を描き出し、激動する当時の日本社会を全景的に描いている。それは近代以降の日本の中国侵略の歴史を振り返り、アメリカによる直接的日本占領が終結に向かい、朝鮮戦争が勃発、国共内戦後も中国をめぐるイデオロギー闘争がなおも激化、そして日本と国民党政府(台湾)の間に平和条約が締結されるなどその後の冷戦構造がまさに形成されつつあるといった背景の中で、ますます複雑化する日中関係を紐解き、思想的主体の再構築を目指すと同時に、中国文学研究会設立時の夢を再び呼び起こし、中国と日本の間に橋を架ける可能性を模索している。

『風媒花』の中で郭沫若をモデルにした人物が「Q」である。過去数年、私は1945年9月から1952年12月までの日中文学交流に関する資料の調査に携わったことで、この時期の日中文学関係において郭沫若が果たした代表的かつ重要な役割について深く認識すると同時に、戦後日本における郭沫若の紹介・翻訳・研究に中国文学研究会の会員が多く業績を残したこと再確認できた。本稿は、戦後初期の日本語メディアにおける郭沫若を念頭に、郭沫若に関する同時期の中国文学研究会同人の業績に触れつつ、武田泰淳『風媒花』における「Q」の人物像への理解を深めることを試みるものである。

## 一 『風媒花』における「桂」と「Q」

全13章から成る『風媒花』の中でQが登場する場面は主に二つある。一つは第1章「橋のほとり」で、台湾国民党政府と繋がりのあるジャーナリストの「桂」が、「中国文化研究会」(モデルである中国文学研究会とは一字だけ異なる)の火曜日の集まりが開かれているバーを訪れる。桂は文化人を自認し、出席者たちと「政治の話は抜きにして、芸術や文学を語ろう」とする。しかし、「政治を抜きにして語れますか」と「軍地」に突っ込まれ、話題は抗戦中の重慶に於ける、ジャーナリストの活躍から、有名な文学学者Qへと移っていく。桂はQとは親友で、重慶でのQの活動を援護したこと、かつてその日本脱出に自分も関係したと語る。それを受けて語り手は次のように続ける。

<sup>1</sup> 本稿は国際郭沫若学会・日本郭沫若研究会主催「第八回国際郭沫若学会学術シンポジウム——郭沫若岡山留学百十周年記念大会——」(岡山大学、2025年11月1-4日)での口頭発表「戦後日文媒体中的郭沫若」(「戦後日本語メディアにおける郭沫若」)の一部に基づいている。

現在のQは新中国文化界の重鎮、政治的指導者でもある。日本に亡命中のQとは、軍地も西も峯も面識があった。あれはもう十余年前だ。峯がやっと、美しい橋の夢想にとりかかったばかりの頃だ。東京郊外のQの寓居を、羽織袴で、青春の峯はイソイソ訪れたものだ。畠の中の一軒家。耳の遠いQは、耳に片手をあてがい、小首をかしげる。あの大きな、記憶力の良い頭部。情熱をひそめたあこがれの中国文化人に教えを受ける、純真な学生として、峯はテーブルをへだて、和服のQの前にかしこまつたのだ。あの正直そうな大きな眼。あの謙遜な、誠実な低い言葉。今はちがう。今峯は、正体不明のジャーナリストが、Qについて語るのを、冷く聴き流す。<sup>2</sup>

「軍地」、「西」、「峯」はそれぞれ竹内好、岡崎俊夫、武田泰淳がモデルであるが、上記引用中に書かれていることは、中国文学研究会発足時の竹内好・岡崎俊夫・武田泰淳らと日本亡命中の郭沫若の交流の事実に基づいており、中国文学研究会同人と当時市川に住む郭沫若との間に親交があったこともよく知られている。では「中国文化研究会」の集まりに現れ、Qについて語る桂とはいったい何者だろうか。私はかつて、泰淳が「桂鎮南」と名乗っていた杜宣と顧鳳城との合わさった人物として桂を中国文化研究会の会合に登場させたのも不思議ではないと書いたことがあるが<sup>3</sup>、ここ数年の資料調査で、桂のモデルは崔万秋（1903-1982）の可能性が高いと考えるようになった。そして、この度のシンポジウムで金伝勝氏のご指摘を受け、また金伝勝、羅霄の考証論文を読んで推測がほぼ確信となつた<sup>4</sup>。

『風媒花』中の桂は文化人を自認するが、崔万秋の名は1940年出版の橋川時雄編『中国文化界人物総鑑』に収録されている<sup>5</sup>。それによると、崔万秋は「山東觀城の人。日本に留学して広島文理科大学を卒業、かつて復旦大学外国語文学系教授に任ず」とある。その訳に夏目漱石『三四郎』・武者小路実篤『孤独の魂』『武者小路実篤戯曲集』があり、自著に『通鑑研究』がある。また崔万秋には『重慶美人伝』という作品があるが、これは『風媒花』で「エロティシズムに逃げているところがある」と言われる、桂が重慶で執筆した自信作『時代の花』を思わせる。さらに、前記金伝勝、羅霄の論文によると、崔万秋は1931年末に、上海に一時帰国し新聞『大晚报』の創刊準備に携わり、1933年3月、大学を卒業後正式に『大晚报』の編集者となった。郭沫若は崔万秋主宰の『大晚报 火炬』に『創造十年続編』を1937年4月から連載しただけでなく、その前にも複数回、寄稿している。二人には共通の知人がいて手紙による交流もあったはずである。崔万秋は、郭沫若との関係について「日

<sup>2</sup> 泰淳作品の引用は原則として『武田泰淳全集』増補版（筑摩書房）に拠る。

<sup>3</sup> 郭偉「武田泰淳における〈風〉—杜宣、謝冰瑩ら留学生との交流を中心に—」（『周作人研究』第12号、2021年6月、pp37-56）。

<sup>4</sup> 金伝勝 羅霄「『新民報』『大晚报』的両篇郭沫若訪問記及其他」（『新民報』『大晚报』掲載郭沫若訪問記二篇その他について）（『郭沫若学刊』2023年第4期、pp53-60）

<sup>5</sup> 中華法令編印館（北京）、1940年10月25日、p 504。

本にいる郭沫若」、「八·一三前郭沫若先生帰国の経緯」の二文を発表している<sup>6</sup>。前者は崔が1933年1月、市川の郭沫若宅を訪れ、郭沫若に会えず夫人の郭安娜（佐藤富子）やその子供たちに会ったこと、後者は崔主宰の『大晩報 火炬』に郭沫若が寄稿したこと、1937年8月13日に勃発した第二次上海事変の直前に、駐日本大使館の仕事で崔が東京に赴き、郭沫若の日本脱出に関与しつつまだ面識のない郭沫若の依頼で日本に残った家族を見舞いにいったこと、また戦争中、同じく宣伝工作に従事することで、崔が郭沫若から助力と指導を受けたことなどが書かれている。桂がいう「親友」ではないが、そういった崔万秋と郭沫若の関係が『風媒花』で桂がQについて語るという設定に反映されているのであろう。ただし、泰淳が崔万秋の文章を読んだのかそれとも中国文学研究会の会合で実際に崔万秋の話を聞いたのかは定かではない。

崔万秋と中国文学研究会の交流について、現段階で確認できる文献は、同人の一人である実藤恵秀編註『中国現代文選』（文求堂書店、1937年4月25日）に崔万秋訳夏目漱石「草枕」の一節が巻頭に収録されている、その一点のみ。間接的なものには、以下のようなものがあげられる。崔万秋が『抗戦第二年代』の日本語版（大芝孝訳、ジープ社、1950年8月15日）に寄せた「著者序」によると、その作品を最初に日訳したのは室伏高信の令嬢、室伏クララであった。クララは泰淳小説「聖女侠女」（『思潮』1948年6月号）のモデルであり、泰淳と終戦前後の上海で接点があった。また『抗戦第二年代』の「訳者序」に「倉石武四郎先生」への謝辞が述べられているが、倉石武四郎は1949年から東大文学部教授になり、東京に移っている。さらに言えば、戦後、東京で台湾出身の在日華僑によって発行された日本語新聞『中華日報』に竹内好、武田泰淳を含め、中国文学研究会の複数の同人の署名作品が見られるが、『中華日報』は当時、中国駐日代表団と密接な関係がありその指導下にあった。1948年3月8日、上海の『中華時報』副社長兼編集長であった崔万秋は国民党政府から中国駐日代表団専門委員として派遣され東京に長く滞在するようになり、中国文学研究会の会合に出席した可能性もあるのである<sup>7</sup>。『風媒花』における台湾国民党政府と繋がりのあるジャーナリストという桂の設定は、そういった事情に基づいているとも考えられる。ちなみに『風媒花』の第1章が掲載されてから3か月後の1952年4月、日本と国民党政府（台湾）の間に平和条約が締結され、崔万秋は、その後、駐日本大使館一等秘書、大使館参事などを歴任し、台湾国民党政府の外交官としての道を歩んだ。

『風媒花』では、桂を、そのあたかも政治と無縁の文学があり得るというまやかしを軍地

<sup>6</sup> 原題、初出はそれぞれ「郭沫若在日本」（『新時代』第4卷第3期、1933年4月1日、pp84-88）、「八·一三前夕郭沫若先生帰国経過」（『時事新報』1941年11月16日。ただし筆者（郭偉）が確認できたのは、『郭沫若学刊』2017年第3期掲載の、廖久明による整理版、pp6-8。）

<sup>7</sup> 崔万秋が東京に到着した日付は、『中華時報』1948年3月9日の記事「唐菊生崔万秋赴日」による。なお、崔万秋は1947年2月にも、マッカーサーに招待された中国記者団の一員として日本を17日間訪問したことがあり、その記録を「日本見聞録」という題名で同年3月から上海の『中華時報』に連載している。

が正面から否定し、峯は桂を「正体不明のジャーナリスト」だと断じ、若い同人の「原」に至っては桂を全く信用していない。新政府から派遣されたわけではない、台湾政府と関係の深い記者を、原は眞の中国人と考えられないである。先輩たちの置き去りにした桂に向かって原は「単なる中国文化は無いわけなんで、何者を代表する文化を紹介すべきか、それが先決問題じゃないでしょうか」と食い下がる。原のモデルは千田九一であるが、千田は、郭沫若『訪ソ紀行』(原題『蘇聯紀行』、日本出版協同、1952年10月)の訳者である。その「訳者あとがき」によると、この翻訳は1947年の翻訳権問題以来、いわゆる筐底に眠っていたものであり、武田泰淳が終戦直後、上海から持ち帰って貸してくれた原書を使用したとのことである。泰淳が上海から引き上げる際、荷物制限があるため、自作原稿や日記類までも堀田善衛に託したことを考え合わせると、桂に対する原の態度、発言の意味が一層、明瞭となるのであろう。

ところが、『風媒花』では「確固たる中国の文学者」「明確な代表的中国人」「新中国の立派なスポークスマン」であるQもまた、日中混血児青年の「三田村」によって批判されるのである。

## 二 『風媒花』における「三田村」と「Q」

三田村は同人「中井」と同じ横浜出身で、かつて酒に酔った中井は三田村の母親が中国人と聞き、三田村に泣き叫びながら抱きついた人物である。三田村は自分が「台湾人、つまり福建人の子孫」だといい、作品の後半で判明することだが、その母親は戦争中でも青天白日旗と孫文の写真を部屋に飾り、ついに日本商人にいじめ殺された。今、三田村は右翼活動家である「清風荘主人」の屋敷に入りし、右翼の精神的なリーダーである「細谷源之助」老人に可愛がられている。Qが登場するもう一つの場面は第5章「最初の犠牲者」で、三田村が軍地を相手取って議論するなかで言及されるのである。

三田村は「橋を架けるとは、要するにこの運命を甘受しない行為ですからね。大体が無理と申すほかはありません」と断言した上で、自分の体内、「血液の流れの中で、橋はとっくの昔に架っちゃってる」という困った事態についてはつきりさせようと、19世紀以来の中日関係における加害者と被害者という問題について混血児の立場を交えつつ研究会の同人らが敬愛するQの例をとて自分の見解を延々と述べる。以下はその一部である。

Qさんの『ソ連紀行』御存知でしょう。あれを読むと、終戦直前に、Q氏はソ連へ飛行機で出発する。そのとき悲壮な別離の一首を詠んでいますね。我々から見れば、ちょっとロマンティックすぎる詩ですがね。Q氏は飛行機で、日本の妻子と、中国の妻子の両者に対して、生別死別の熱情をほとばしらせています。そんな私生活上の矛盾をさらけ出す勇気を、Q氏は持っています。だがここで我々がひつかかるのは、そのQ氏の悲壮さと、台湾で国民党のロクを食まねばならなかった彼の長男の悲壮さとが、全く異っているとい

う一点ではないでしょうか。Q氏はあなたがたと同様、古風純粋な国民的幸福に恵まれて いる。ところが彼の息子たちは、それを失った位置から出発しているという点ですよ。何 も私は、混血児の特権を主張しているわけではありません。そんなみじめな特権は持たぬ 方がましですからね。あなたがたは幸か不幸か混血児ではない。ここ三、四代の血液の点 ではね。そのくせ、あなたがたは、心理的精神的には、日本人であると同時に中国人であ ろうとする、無理な企てを敢てせねばなりません。

三田村はさらに研究会の人々が「被害者の立場に立とうとする加害者」という役割をうけ もち、その矛盾でやっと文化人としての誇りを保っていられると指摘し、その悲劇性に親近 感をおぼえると述べる。それを聞いて、原は「その矛盾を克服するのこそ我々の任務だ」と 答え、軍地は「祖先はどうでもいいが、御当人はどうするつもりかね」と切り返す。

三田村の発言は戦後日本文学の二大争点、つまり「文学者の戦争責任」と「国民文学」の 文脈を踏まえているのが明らかである。竹内好は二者とも深くかかわっているが、特に『風 媒花』の連載中に、竹内好も『群像』に複数の評論を書き、「国民文学の方向(座談会)」(『群 像』1952年8月号)に出席し、『風媒花』最終回が掲載された11月号に「文学の自律性な ど——国民文学の本質論の中」を発表している。泰淳は三田村を通して、軍地を代表とする 研究会やQの立場を相対化しているが、それは批判しながらも竹内の主張と呼応し、相互補 完の関係にあると言えよう。

(以下続稿)

## 郭沫若「カルメラ娘」の二、三問題について

藤田 梨那

### 序

「カルメラ娘」は、郭沫若初期作品中的一篇である。1924年に執筆されている。この作品は彼が留学した福岡を舞台にし、中国人留学生「私」が家庭を持ちながらある駄菓子屋の看板娘に恋心を抱く物語である。手紙の形をとり、友人に自分の恋情と倫理的苦悩を語り、自殺の決意を告げる。主人公の赤裸裸な恋情を描く点においては郁達夫「銀灰色の死」「沈淪」、張資平「一番冗員」と共通する性格をもつ。民国初期中国人留学生の在日生活と精神状態を反映し、この時期の留学生文学の代表作品である。

「カルメラ娘」についての研究は目下すでに一定の成果を上げている。研究の角度はさまざまである。夢分析、ゲーテ『少年ウェルテルの悩み』の影響、異国女性の描写等がある。<sup>1</sup>しかし、われわれが仔細に作品分析を進めていくと依然として未解決の疑問点を発見する。例えば、当時の大正文化、社会風俗と作品との関係、特殊心理学の応用などを挙げることができる。これらの問題は一見些細でさほど重要でないように見える。しかし、詳細に分析し、検証するとこれらの問題点は実際作品の中で重要な隠喻と理論的根拠を担い、作者の異文化に対する捉え方、審美観を反映していることが見えてくる。本論文はこの作品について三つの問題点を検討していく。

### 一、「カルメラ娘」正三角形の意味

「カルメラ娘」には三人の女性が登場する。カルメラ娘、「私」の妻瑞華、法学士の妻S夫人。瑞華は中国人で、妻としてけなげに一家事をやりくりして典型的な良妻賢母であり、「私」にとって瑞華は聖母マリアのような存在である。S夫人は日本女性で、虚偽鄙猥、娼婦のように「私」を誘惑する。カルメラ娘も日本人である。社会の最底辺で生活している。駄菓子屋の看板娘をしている。時にはカフェで女給をする。最後は東京のある商人の妾になる。三人の女性は、階級、教養及び性格も異なる。瑞華とS夫人に対して、カルメラ娘は処女のうぶと清らかさをもって描かれている。小説において「私」と三人の女性との心理的

<sup>1</sup> 武継平『郭沫若——日本留学時代』九州大学出版社 2002 年

李斌『论郭沫若早期的自我小说创作』东岳丛刊、1993:10

劉怡「‘永恒之女性领导我们走’——从郭沫若的诗、剧、小说看他的女性观」「郭沫若学刊」、1993、12

劉光華「郭沫若早期自我小说中的日本女性形象」「郭沫若学刊」、1988、9

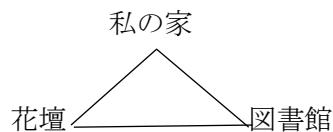
吳佩謙「郭沫若笔下的日本女性形象」「安徽文学」、2011、3

なかかわり方はたびたび三角形の構図を構成する：



文学において男女の三角関係は一つの古典的な構図であるが、郭沫若は作品中に一つの幾何学的概念を提示する。すなわち正三角形である。小説中にまず次のような三角形が登場する：

私の寓居はもともと H 市の海岸近くにあり、寓居から図書館に行くには電車に乗るわけだ。電車の駅、花壇と私の寓居はちょうど一つの正三角形の三つの頂点となる。<sup>2</sup>



大正時代の福岡鉄道資料から当時郭沫若が図書館に行くのに利用したのは福博電車であると分かる。郭沫若は当時九州大学の裏門、海を臨むところに住んでいて、海辺の千代松原と箱崎八幡宮に近かった。図書館に行くには福博電車の箱崎駅から今川行きの電車に乗り、下橋駅に下車する。図書館は下橋駅の近くにあった。下図は大正時代の福博電車線（赤線）である。

郭宅-花壇-箱崎駅



<sup>2</sup> 「カルメラ娘」『郭沫若全集』第9卷 p208 人民文学出版社 1985年 北京 筆者訳

「私」は毎日電車に乗って図書館に行く。「カルメラ娘」に描かれる恋物語は「私」が図書館で読んだある小説に端を発す。花壇はカルメラ娘の家のある所である。「私」の家、箱崎駅、花壇、この三点が一つの正三角形を構成する。正三角は言うまでもなく幾何学の用語である。三つの角度は等しく 60 度、三辺が等辺である。上の図が示す三角形は郭沫若が強調した正三角形のイメージである。作者の意図はどこにあるか。ストーリーはこの正三角形の形で展開していく。三つの頂点を占める人物は時には「私」——瑞華——カルメラ娘、時には「私」——S 夫人——カルメラ娘になる。「私」は妻瑞華に対して常に畏敬の心を持ち、聖マリアと崇める。カルメラ娘に対しては大きな愛憎と性的誘惑を感じ、求めて得られない、ついに精神に異常を来たす。瑞華、カルメラ娘はそれぞれ理性と本能という異なる性質をもつ存在となる。彼女たちの魅力は「私」の心においてほぼ同等であるゆえ一層「私」を悩ませる。正三角形の形は二人の女性の間で苦しむ「私」の苦悩を強調する。つまり、多種多様の女性関係は「私」の複雑で、矛盾する心理を浮き彫りにし、よりリアルに自己解剖と告白に役立っている。

## 二、カルメラ娘という命名

小説「カルメラ娘」に登場する中国人留学「私」は駄菓子屋の少女にカルメラという名を付ける。

私はあの子の名前を知らない。あの子が売っているのは Karumera というお菓子だ。この語は恐らく西班牙語の Carameloからきているだろう。この語の発音が気に入ったから、私は西班牙式に倣って、彼女を Donna Carmela と呼んだ。あの子に西班牙女性の洗礼を受けさせた。<sup>3</sup>

「カルメラ娘」に登場する日本の少女は、カルメラ焼きを売る駄菓子屋の娘である。カルメラ焼きは安土桃山時代に西洋から伝來した所謂南蛮菓子の一つである。伝来の初期において、ポルトガル人宣教師が持ち込んだとされている。15 世紀半ば、ポルトガルは徐々に海運力、軍事力を強め、世界進出に乗り出した。1550 年、平戸に最初のポルトガル船が来航し、貿易船に便乗して来日したイエズス会の宣教師たちによってキリスト教は平戸、長崎を中心として国内に広まっていった。戦国大名はポルトガルとの交易によって、鉄砲や火薬などを手に入れた。1549 年、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸し、数年に渡り日本で布教活動を行った。当時、キリスト教宣教師は布教のために南蛮菓子を配布したとされる。南蛮菓子の伝来について、中川清氏は論文「南蛮菓子と和蘭陀菓子の系譜」において、『太閤記』(1626 年)『原城紀事』(1846 年)などの史料から、当時ポルトガル人が持ち込んだ菓

---

<sup>3</sup> 「カルメラ娘」『郭沫若全集』第 9 卷 p213 人民文学出版社 1985 年 北京 筆者譯

子を挙げている。『原城紀事』によりと、弘治3年（1558年）、ポルトガル人伴天連（バテレン）が、肥前唐津で布教したときポルトガルの「美酒」（ぶどう酒）を振る舞い、菓子を作った。その菓子は、「角寺鉄異老（カステイラ）、復鳥而（ホウル）、革二滅以而（カルメイル）、掩而皿兮（アルヘイル）、可目穴伊（カンヘイ）」と五種類である。この中にカルメラが含まれている。更に氏は、『太閤記』のバテレンに関する記述に、「かすていら、ぼうる、かるめひる、あるへい糖、こんべい糖」を上げ、「かすていらなど5種類南蛮菓子は『原城紀事』の記述と全く同じである。」と指摘する。カルメラのポルトガル語とスペイン語はともにcarameloであるが、「革二滅以而（カルメイル）」はポルトガル語「caramelo」の発音と一致する。

南蛮菓子は伝来当時では珍しい菓子であったが、キリスト教迫害の江戸時代を生きのび、日本に定着した。中でもカルメラは、大正時代では一般庶民も作るようになり、祭りや縁日の出店で売られるようになる。カルメラ焼きと呼ばれ、庶民的な菓子になったのである。

「私」はなぜ駄菓子屋の娘に「Donna Carmela」と名付けたのか。筆者が注目したのは、上記引用文下線部にある三つの要素、カルメラの語源、この語の発音、そして西班牙女性の洗礼、である。お菓子としてのカルメラの伝来とカルメラという名前はポルトガルと関係することは文献の記述で明らかである。これに対して、「カルメラ娘」の主人公「私」は、カルメラの語源をポルトガル語ではなく、スペイン語carameloとしている。無論、カルメラの語源はポルトガル語とスペイン語では同じくcarameloである。「Donna」は女性の名の前に置く尊称で、古イタリア語Donaが語源である。「Carmela」は、『西日中辞典』によると、これは女子の洗礼名Maria del Carmenの愛称である。Maria del Carmenの愛称は「Carmela」の外に、Carmenhu、Maria Carmen、Menchuがある。すなわち、スペインカソリックにおいて、女子が洗礼を受ける時に付与される洗礼名Maria del Carmenに付随する愛称の一つは「Carmela」である。この「Carmela」は、本来、飴である「caramelo」とは別語であるが、その発音は大正期に定着したお菓子カルメラKarumeraの発音と同じである。「私」が駄菓子屋の少女に「西班牙女性の洗礼」を受けさせるというのは、「Carmela」はスペインカソリックの洗礼名と関係するからであるということが明白である。更に「Carmela」の発音は日本語のカルメラと類似しているので、愛称の甘いニュアンスを醸し出す。郭沫若は作品にスペイン語を取り上げたのはやはりカルメラ娘に多くスペインの色彩を持たせたかったのではないか。<sup>4</sup>

### 三、自殺と「死の欲動」

「カルメラ娘」の中で自殺のシーンは三つ描かれている。一つは「私」が見る夢の中で、

---

<sup>4</sup>藤田梨那「大正期のイバネスブームと郭沫若への影響」「国士館人文学」第14号 2024年3月参照。

カルメラ娘が愛を告白した後、崖から身を投げる自殺である。あの二つは、「私」の自殺である。「私」は一度入水自殺を図るが未遂に終わる。その後、再度自殺を決心する。作品は「私」が二度目の自殺を実行しようとするところで終わる。すなわち、三つの自殺の中、二つは実行したものである。カルメラ娘の自殺は夢であるのに対して、「私」の入水自殺は現実のものである。更に、夢の中の自殺は、驚きと恐怖をもたらしたのに対して、「私」の入水自殺は実に美しく描かれている。

太陽が海に沈む頃、水平線から五六丈ほど高いところにある雲層から半輪の光線が差し込んできた——ああ、あの子の睫毛、あの子の睫毛だ！バラ色の夕霞は恥じらいに染まるあの子の頬を連想させる。私は抑えきれない興奮を感じた。白波が私に手招く。私はその冷たい腕にすがり、酔わんばかりにあの処女紅（バージンレッド）を追い求め、あの睫毛美を追い求めていく……求める物は永遠にその距離を変えない遠くにある。力が尽きた。鉛の錘が私の足を海の底へと引っ張っていく。世界は目の前から消えた。塩水が口に流れ込んでくる。最後の垂れ幕が開いた。その瞬間、私は開闢以前に戻った。<sup>5</sup>

この自殺のシーンには、夢の中のカルメラ娘の自殺に感じた恐怖は全くない。あるのは求めてやまない美の光景と陶酔である。夕陽の光線にカルメラ娘の睫毛を、夕焼けに娘の処女紅を、白波に娘の手を、とあくまでも美しいものを連想する。海に身を投じたにもかかわらず、苦痛がなく、むしろ美しい対象に酔わんばかりに惹かれていく。しかし、求める対象との距離は平行線を辿るように永遠に縮まらない。これは、「私」の恋に様々な障害があり、成就できない現実を象徴している。「私」が死んでいく最後の瞬間も恐怖や苦痛はなく、むしろ一つの不思議な世界に入っていく。それが“開闢以前”である。

この自殺のシーンには、二つの要素が働いている。一つは、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』の主人公、ウェルテルが自殺の前に語った言葉である。もう一つは、心理学でいう「死の欲動」である。

『若きウェルテルの悩み』において、主人公ウェルテルが自殺の前に次のように語る、

帳をかけて、その中に入ること！これで事が終わるのではないか！それなのにこの狐疑逡巡は何ということだろう？その奥のありさまが知りがたいからか？そこから戻ってくることができないと思っているからか？はつきりしたことが分からぬところには混乱と闇がある、これがわれら人間の精神の本質であるらしい。<sup>6</sup>

---

<sup>5</sup> 「カルメラ娘」『郭沫若全集』第9卷 p232 人民文学出版社 1985年 北京

<sup>6</sup> ゲーテ『若きウェルテルの悩み』 竹山道雄訳 岩波文庫 p144

ウェルテルは既婚者であるロッテを愛し、ロッテなしでは生きる意味がないと考え、死を決心する。ここで死を“帳をかかげて、その中に入る”と表現する。“帳”（とばり）は生と死を隔てる垂れ幕を意味する。このイメージは恐らくキリスト教から連想したのであろう。キリスト教において、エホバの威厳を典型的に表現したのは“会見の天幕”である。『聖書』出エジプト記第26章からの数章に、“会見の天幕”的建立について、エホバがモーセに具体的に指示している。“会見の天幕”は“幕屋”、“エホバの家”とも呼ばれ、キリスト教徒が崇拝用の天幕であり、エホバに問い合わせる聖なる場所である。“幕屋”には三重の入り口があり、それぞれの入り口に垂れ幕が掛かっている。一番外側は大庭への入り口、ここに信徒たちが入ることができる。次は聖所への入り口、ここは祭司が入ることができる。一番奥は至聖所への入り口、ここには民も祭司も入ることが許されない。大祭司すなわちイエス・キリストのみ入ることができる。至聖所の奥には、所謂“契約の箱”が収められている。これはエホバが住むという象徴的な意味合いをもつ。第三の垂れ幕は最後の幕であるが、この垂れ幕は、イエス・キリストが十字架の上で死んだ時、上から裂けたと言われている。すなわち、イエス・キリストは自分の血によって人間たちの罪を贖った。エホバは、これによって人間たちを許したと言われている。

『若きウェルテルの悩み』に見る“帳をかかげて、その中に入る”とは、キリスト教の“会見の天幕”を背景としていると考えられないであろうか。しかし、ウェルテルの死は自殺であり、そもそもキリスト教の教理に反する行為である。到底“会見の天幕”的垂れ幕は彼のために開かれないと。そのため、ウェルテルは「その奥のありさまが知りがたい」と悩む。すなわち、キリスト教の“会見の天幕”に対して、ウェルテルがかかけようとする帳は全く別意味の帳なのである。そこに罪を贖ってくれるイエス・キリストが存在しない、帳の奥には契約の箱もない。彼の自殺は人間が自分の欲望を追い求めた末に選んだ死であり、その先は未知な世界なのである。はっきりしないから「混乱と闇がある、これがわれら人間の精神の本質」だという。これは、ゲーテが神の精神ではなく、一人の人間ウェルテルの心を追求し、描く代表的なシーンと見ることができよう。

郭沫若は日本留学中に『若きウェルテルの悩み』に傾倒し、1920年にこの作品を中国語訳し出版した。この時期、彼の『若きウェルテルの悩み』に対する熱心さは『三葉集』によく現れている。1920年代執筆したいいくつかの書簡体小説にもその影響が顕著に表れている。「カルメラ娘」の最後に、「私」が再度自殺するため、青酸とピストルを持って東京に向かう箇所も、ウェルテルの自殺の影響と見ることができよう。先に挙げた「カルメラ娘」入水自殺の場面にある「最後の垂れ幕云々」はウェルテルが死ぬ前に吐露した言葉を意識したと考えるのが自然であろう。

もう一つの要素としては、フロイト精神分析学の「死の欲動」を挙げることができよう。それを考えられるポイントは、自殺時の陶酔と“開闢以前”的二点である。「カルメラ娘」にいくつかの場面にフロイドの精神分析学を反映している。例えば、スペイン女性が求婚者を鞭打ちする話であり、ここにフロイドのサディズム/マゾヒズムの学説を反映している。

この二つの性情は相反しながら互いに依存する一種の変態心理を醸し出す。

郭沫若が日本留学中に心理学に接した。心理学は彼が文学を考える上で重要な視点と根拠となつた。彼の試みは、1920 年代の中国においてきわめて先駆的である。この時期、彼が心理学の観点から文学を論じた文章は、以下の通りである。

「論詩三札」 1921 年

「『西廂記』芸術上の批評とその作者の性格」 1921 年

「批評と夢」 1923 年

「生活の藝術化」 1925 年

「文学の本質」 1925 年

「リズムを論ず」 1926 年

『創造十年』 1932 年 (1920 年代の回想として)

『創造十年続篇』 1937 年 (1920 年代の回想として)

これらの文章中に心理学と関係する事項及び言及した心理学者については、表 1 を参照してほしい。

表 1

論文名	年代	内容	言及された心理学者
論詩三札	1921	情緒、内在韻律、心理学	
『西廂記』芸術上の批評とその作者の性格	1921	変態性欲、リビドー、ヒステリー	精神分析派
批評と夢	1923	意識の流れ、精神分析、夢、抑圧された欲望	フロイト、ユング、サイディズ、モートン・ピリングス
生活の藝術化	1925	天才と狂人	チェーザレ・ロンブローネ
文学の本質	1925	苦悶の象徴、快と不快、催眠	ヴァント
リズムを論ず	1926	情緒、緊張と弛緩、実験心理学、要素主義、	ヴァント
創造十年	1932	夢、苦悶	
創造十年続篇	1937	ヒステリー、煙突掃除	精神分析家たち

明治時代に心理学が日本に伝来し、大正時代には心理学研究はすでに広く存在した。いくつかの大学は心理学の科目を開設し、医学部に精神科を開設した。大量の西方翻訳と研究論著が世に出て、各種心理学専門誌が刊行された。その中に雑誌「変態心理」(日本精神医学会)も特色と影響力をもつ雑誌である。ここから、当時九州帝国大学医学部に留学していた郭沫若がこれらの書物や雑誌に接するの容易であると推測できる。表 1 からも分かるように、郭沫若が留学時期に心理学に対する知識はすでにある程度の広さと深さをもっていた。変態心理及び夢分析、異常心理についても一定の知識を有していた。

フロイトは『性理論のための三篇』において、所謂生物学でいう人間や動物の性欲動の研

究からリビドー理論の枠組みを提示した。サディズムとマゾヒズムはこの性欲動（エロース）の向かう目標によって生じる両価的感情である。その後、フロイトはサディズムとマゾヒズムの殺害願望と自己破壊的傾向に注目し、研究を更に進める。1920年、『快原理の彼岸』において、はじめて「死の欲動」の概念を提示する。

「死の欲動」についてフロイトは次のように指摘する、「欲動とは、より以前の状態を再興しようとする、生命ある有機物に内属する衝迫である。」 すなわち、「死の欲動」とは、死の本能の支配に従って、有機体の早期の状態、無の状態へと回帰しようとする欲動である。更に欲動の本質について、「欲動は守旧的であり、歴史的に獲得されたものであって、退行を、つまり、以前のものの再興を目指す。（中略）その目標はむしろ、生命あるものがかつていったん放棄したものの、あらゆる進化発展の迂路を経ながら帰り着こうとする昔の状態、生命の出発点である状態でなければならない。生命あるものすべて内的根拠に従って死に、無機的なものへと帰つてゆく。（中略）あらゆる生命の目標は死であり、翻つて言うなら、無生命が生命あるものの先に存在していたのだ。」 と、死の欲動は守旧的で、退行的指向をもつ。退行の究極点は死あるいは生命以前である。精神医学者熊倉伸宏はその著書『死の欲動——臨床人間学ノート』において、フロイトの「死の欲動」を次のようにまとめている。死の欲動は、「（1）自我が抵抗し難い衝動である。死の本能は無言であり、ただ反復強迫的に行動化されるだけ。（2）最も蒼古的な欲動である。退行が達しうる究極点に由来する。それは生命発生の限界点、非生命への移行点を目的とする。（3）悪魔的な生命の破壊欲動である。その攻撃性は外的対象に向けられる以前に、リビドーと融合して自我に向けられた自己破壊衝動を想定し、一次的マゾヒズムと呼ぶ。」 熊倉氏の解釈とまとめは、思弁的、難解なフロイトの学説を理解する上で非常に有効であると考える。ここで、「死の欲動」の本質、向かう目標、更に、サディズム/マゾヒズムとの関係が明白に要約されている。特に、サディズム/マゾヒズムと「死の欲動」の関係、すなわち、生命破壊において、サディズムは本来「死の欲動」に属するものであり、自己破壊においてはマゾヒズムもやはり「死の欲動」の表現であるという指摘はフロイトの「死の欲動」理解に示唆的である。

これまでの分析から、「死の欲動」が指向する無機的世界は、ただの死を意味するのではないことが分かる。フロイトは有機的生命体の誕生に関して、古代生物学からアメーバ、単細胞の運命に注目し、ハルトマンの死の定義「個体の発展の終結」を引用しつつ、「この意味では原生生物もまた死ぬのであり、原生生物にあって死は常に生殖と一致することになる」と論じる。“死” や “無機的” 世界は生を孕んでいる。「死の欲動」の目標は “無機的世界の休息に帰還” 、すなわち生命発生以前の原初へ帰ることである。この難解なテーマを彼は “死” によって、隠喩的に表現した。

さて、ここで郭沫若に戻ろう。「カルメラ娘」にある「私」の入水自殺の場面にある二つの特徴、自殺時の陶酔と“開闢以前に戻った”について考えてみよう。「私」が自殺を図る現場の風景、夕陽の光線、夕焼け、白波はすべてカルメラ娘へと連想され、「私」は完全にカルメラ娘の魅力の虜となり、導かれるまま海にどんどん入っていく。ここに、スペイン女

性の鞭に打たれる場合のマゾヒスティックな情感は依然として働いていると見るべきであろう。マゾヒズムの快感、陶酔は死の恐怖や苦痛に打ち勝って、むしろ喜んで死に赴く。マゾヒズムのたどり着くところが「死の欲動」の目標と同一である。

“開闢以前に戻った”の全文は、「最後の垂れ幕が開いた。その瞬間、私は開闢以前に戻った」であるが、“開闢以前”は死あるいは生命発生以前の原初を意味するであろう。しかし、ここには、『若きウェルテルの悩み』の場合のように、“狐疑逡巡”“混乱と闇”がない。無論、苦痛も、後悔もない。すべては自然の成り行きに従って終結していく。“開闢以前”は非生命、無機的世界であるが、しかし、生物界が歩んできた歴史は、すでに、われわれに、この非生命、無機的世界においてやがて生命が出現し、細胞分裂し、発展するプロセスを開拓することを教えている。つまりここに、フロイトの「死の欲動」を目指す目標、「有機体の早期の状態」、「無機的世界の休息に帰還」、すなわち生命発生以前——しかし、開闢を孕んでいる——原初への帰還を表現すると見ることができよう。心理的に見た場合、「私」の自殺には「死の欲動」が駆動していることが明らかであろう。この自殺の場面の特異性は、フロイト精神分析学の応用によって、美と愛欲を追求した末に到達した究極点を具現していると言えよう。

#### 四、結論

以上の分析から、最初に提示した問題点について以下のような結論をまとめることができる。

1、「カルメラ娘」の中に見られる科学用語は、いまのわれわれにさほど重要に見えないが、当時日本留学中の郭沫若には日本の近代科学が大いに魅力があり、想像力を刺激する力を持っていた。彼は作品に多く近代科学の用語を使用した。多くの場合、一種の隠喩と象徴の働きを發揮した。このことは「カルメラ娘」に限らず、彼の初期の小説や詩歌にたびたび見られる。ここに近代文明、近代科学の角度より郭沫若の文学活動を見直すという新たな視点が展開できると考える。

2、駄菓子カルメラは小説「カルメラ娘」において重要な役割を果たしている。日本人少女の呼び名になり、少女の純潔さと甘美さを表現する。なぜごく庶民的な駄菓子がこのような役割を果たせたのか。それは作者郭沫若が駄菓子カルメラにキリスト教的因素を付与し、下層社会に生きる少女に一種の宗教的性格を与え、その美しさを高めたからと見ることができよう。

3、郭沫若の作品と心理学の関係についてはすでに多くの学者によって注目され、研究されてきた。しかし、これまでの研究はほとんど郭沫若自身が言及した心理学の範囲内に限られている。そのため、先に挙げた「カルメラ娘」中の自殺の場面についてその深い意味はほとんど看過してきた。「私」の自殺はなぜ美への追求と美の陶酔によって描かれるのか。この問題はサディズム/マゾヒズムの問題と関係している。フロイドの「死の欲動」心理学に

よって分析してはじめてそこに表現される主人公「私」の心理が明らかになる。サディズム/マゾヒズムと「死の欲動」の問題と大正時代の“大正浪漫主義”、“大正教養主義”及びこの時代に流行していた“変態心理”と繋がりをもつ。また当時流行していた自殺や心中などの社会現象とも関係している。郭沫若にはサディズム/マゾヒズムと「死の欲動」についてはつきりした言及が見当たらないが、このような時代背景を考慮に入れ、更に彼がこの時期に発表した文章に心理学に触れた言説（例えば『西廂記』芸術上の批評とその作者の性格）中の变态性欲への言及等）を考え合わせるならば、彼がフロイドの「死の欲動」に一定の知識を持っていたことが分かる。彼がフロイドの「死の欲動」学説を小説に応用した目的は、より深く近代人の心理を描き、より深い自我解剖を実現するためであると見ることができよう。郭沫若の留学期の作品から、われわれはこの時期彼の美意識に心理学が深く影響していたと認めることができるよう。

## 学会報告

第八回国際郭沫若学会学術シンポジウムは11月2日-4日にかけて岡山大学で開催されました。今回の学会は、国際郭沫若学会と日本郭沫若研究会及び岡山大学の共同開催となりました。中国、韓国、アメリカから22名の学者が出席しました。日本郭沫若研究会から10名の方が参加し、研究発表を行いました。開会式には岡山大学那須保友学長、森田繁前学長、遊佐徹副理事、張紅教授も参加され、那須学長から開会のご挨拶をいただきました。

会場は岡山大学医学部のある鹿田キャンパスでありました。110年前郭沫若は岡山の第六高等学校第三部医科に2年間留学しました。戦後、第六高等学校第三部医科が岡山大学医学部に編入された関係で、岡山大学医学部の前身と言われています。参会者一同、郭沫若と縁深いこの場所で学会を開催することに深い意味を感じていました。

学会はまず基調発表から始まり、四川大学の李怡教授、楽山師範学院の廖久明教授は相次いで立ち、郭沫若の岡山留学と彼の精神成長、詩歌翻訳と創作の関係についてお話しされました。岩佐昌暉先生は郭沫若が日本亡命時に乗った日本の郵船「盧山丸」に関する調査を報告されました。

基調発表の後学会は二つの会場に分かれ、研究発表が行われました。郭沫若について、文学、歴史研究、考古学、左翼運動、そして書に及び、幅広く研究成果を披露されました。日本側では郭偉さんの「戦後日本メディアの郭沫若評価」や、岩崎菜子さんの「郭沫若と中日文化研究所」、松宮貴之さんの「日本の郭沫若書法評価の空白」、堀川英嗣さんは「郭沫若の日本脱出を手助けした金祖同、錢瘦铁のその後」などの発表には郭沫若に関する新しい資料の披露があって、会場での討論も盛り上りました。今回の学会に会員ではないが早稲田大学大学院の学生の参加と発表がありました。

また、今回初めて郭沫若の須田禎一宛の書簡の展示もありました。書簡は全部で8通に及び、文面と封筒はほぼ完全な形を保っていました。学会の後、一同は第六高等学校の跡地を訪ねました。現在、六高の跡地に県立朝日高校が立っています。朝日高校副学長金山先生、資料館館長後神先生、六高記念館運営基金業務執行理事中塚先生の出迎えと案内を受け、戦時中の空襲を免れて残っている旧書庫や柔道場、戦後建設された六高記念館を見学しました。柔道場は今も高校生たちが利用しているそうです。六高記念館の庭に郭沫若が書いた詩の石碑もあって、100年もの間、多くの人がここで勉学した日々を刻み込んでいます。

4日に岡山市民公開講座が開かれ、160名以上の市民が参加されました。講座は「郭沫若と岡山」という表題で、森田前岡山大学学長は六高の歴史と郭沫若の留学についてお話をされた後、藤田梨那、名和悦子さん、遊佐徹さんが登壇して、それぞれ講演を行いました。公開講座には岡山県環境文化部担当の方、後楽園の責任者の方、岡山市日中友好協会の責任者の方も出席されました。

今回の学会は専門的な学術発表だけでなく、市民を巻き込んだ形で郭沫若と岡山の話題を広く扱ったところにその特徴があるのではないでしょうか。盛会だったよという声が多く

く聞こえました。学会に参加してくださった皆さんに深く感謝します。一年半前から会の準備に尽力してくれた方々に感謝します。素晴らしい会場を提供してくれた岡山大学にも感謝します。会議の間、日本の会員たちと大学院生が自ら送迎や案内役を買って出てくれたおかげで会の運営がスムーズに進みました。皆様に深く感謝します。

三日間にわたる一連の活動が円満に終わり、達成感を感じると同時に、主催側として日本郭沫若研究会の会員がもっと多く参加してくれれば更に盛り上がるのではないかと考えます。海外から来てくれた学者や 160 以上の岡山市民の熱心さを前にして少し恥ずかしく感じました。日本の研究者たちは、この分野の研究をもっと推し進め、次の大会に皆さん総出で参加してくれることを切に期待する次第です。

藤田梨那



## 書評

書道中的“金枝”

—評松宮貴之《“結”之譜係—“書”的根源是怎樣的行為》(『ムスピの系譜—書とは根源的に如何なる行為なのか』, 東峰書房, 2025)

王瑞 (南京大學全球人文研究院)

書家松宮貴之（まつみやたかゆき）先生的新作『ムスピの系譜—書とは根源的に如何なる行為なのか』(《“結”之譜係—“書”的根源是怎樣的行為》) 2025 年 10 月 15 日在日本出版發行。我在翌日即 16 日赴大阪參加世界漢字學會第十一屆年會，有幸與松宮先生分到同一個分會場。我並非書道中人，學識也孤陋，與松宮先生素未謀面。我是在會上聆聽松宮先生的發表纔認識松宮先生的，松宮先生在會上發表的，正是其新作開篇部分的梗概。我對松宮先生的學術見解極感興趣，遂決定購其大作，一睹為快。會議結束的當天晚上，我在紀伊國屋書店大阪梅田本店買到了松宮先生的著作，十分欣喜。不謙虛地說，我應該是最早讀到松宮先生 2025 年 10 月新書的第一批讀者之一。

松宮先生新作開篇即對一項人們以為常識而習焉不察、耳熟能詳又十分重要的漢字史命題發起了正面的質疑和挑戰。這個傳統的漢字史命題即：漢字起源於“結繩”，其最重要的依據是《易·繫辭下》有“上古結繩而治，後世聖人易之以書契，百官以治，萬民以察”，於是自古以來幾乎所有的學者都將“結繩”與漢字的產生聯繫起來，相關的古人之說不勝枚舉。但是我們似乎從來也沒有考慮過這樣的問題：“結繩”與漢字產生的關係到底是什麼。如果“結繩”是在繩線上打結，那麼我們恐怕需要懷疑，這種“記事”的方法即使延續萬億年也與漢字的產生了無相干，因為它與漢字產生，亦即與“造字”的思維、“書寫”的行為毫無聯繫。當然，我們想象中的“結繩記事”雖然原始，但是也可能它正是摩爾斯電碼 (Morse code) 之類的早

期數字化通信形式的雛形，我們不能說按著“結繩記事”的歷史邏輯就永遠發展不出發達的文明。我們只是說，傳統對於“結繩記事”的認識和理解與漢字的產生和發展斷然無關，以在繩線上打結來記事—這種方法並不構成漢字的起源。這是松宮先生新作的當頭棒喝，極具啟發意義。

那麼漢字起源於哪裡？松宮先生新作告訴我們，漢字起源於兩種寫字的行為。什麼行為？曰“書契”。松宮先生通過古文字、古文獻兩個維度的考察，提出了“書契”二元說：將“書契”二字視為一詞，等同於“文字”，將之視為“文字”的古雅之稱，這是漢代之後儒者的理解，並不是“書契”二字的本義；“書”與“契”本是兩種行為，“書”的本義是用筆寫字，“契”是用刀刻畫，“書”和“契”這兩種行為本身，就是漢字產生的起源。用刀刻畫，這種行為相對簡單；重點難點在於理解“書”。“書”是用筆寫字，用什麼樣的筆？曰毛筆，即用動物的毛結束而成的筆。在松宮先生看來，把動物的毛撮在一起、打結成束，這種做法本身就極不簡單，充滿了人類學意義上的內涵。具體來說，上古時期，動物在人類的社會和認知裏在相當大的程度上扮演著人界與天界溝通交流之媒介的角色，以龜甲牛骨來作為占卜的載體就是這種認知的一個顯例。同樣的，動物的毛也不是尋常之物，而是人與神交流的媒介，正如《墨子·明鬼下》所云“毛以為犧牲”。在這種信仰之下，用動物的毛編結成筆，用以書寫，這不是普通的行為，而是與神交流的一種類似祭祀或與祭祀有關的行為。而筆的前身，正是這樣的編結為一撮的獸毛線繩。把一撮獸毛編結為繩，這正是“結繩記事”之“結繩”的本義。後世的毛筆，就是這般獸毛線繩的演化，有著深刻的人類學內涵和歷史隱喻；或者說，毛筆就是這樣一種攜帶著動物神力的祝祭工具。松宮先生對“結繩記事”的新解，令人耳目一新。這恐怕是學界第一次對於“結繩記事”與漢字起源關係的正面解釋，把“結繩”的行為與漢字的產生之關係首次說清。應當說，這是相當具有解釋力的一個說法。

當然，松宮先生並未完全否定傳統認識對於“結繩”的理解，在繩線上打結以記事，這也確乎是一種古老的記事方法。松宮先生認為，這種普通的“結繩”與製造毛筆以寫字，是兩種並存的記事方式，只是，寫字需要的是一種特殊的“結繩”，即以毛糸扎結而成的筆頭；而普通意義上的在繩線上打結以記事，這種辦法與文字無關，與筆無關。

另一方面，“契”這種行為同樣具有人類學意義。用刀刻畫出線條，其本質是對書寫載體施刻傷痕，是書寫行為的另一種源頭。從刺青文身（入れ墨）到黼黻彫彰（あや），都是這類刻入傷痕之行為的隱喻，而刻痕行為的背後，仍是人向神發出溝通交流的動機。總之，“書”和“契”代表了兩種創造文字的傳統，“書”是以獸毛結繩為中介，借獸毛的神力與神溝通，其行為的用具是毛筆，載體主要是簡牘；“契”是以刀直接在載體表面雕刻文字以與神靈交流，載體包括甲骨、玉石、銅器等。這兩種傳統在漢字起源的漫長階段長期並存，其中又以毛筆書寫的“書傳統”（“木簡書史”）代表了後世主流書寫傳統的真正源頭。當然，“契傳統”（“契刻書史”）也一直延續至今，以摩崖石刻等形式存在，只是從數量上看相對次要而已。從性質上看，這兩種傳統都很重要，都是漢字的起源行為，二者亦是後世書學中“帖學”和“碑學”的源頭。以上論點主要集中在松宮先生新書的序章與首章中，同時也構成全書論證的主軸。全書的論述圍繞“筆”—以獸毛編結而成的毛筆—這一獨特的書寫用具展開，向讀者展現了一幅浪漫神奇、

煥然全新的書法史（“書史”）圖景，回答了諸多長期以來人們難求甚解、不了了之的學術問題。圍繞著毛筆乃是神器（“呪具”）的這一核心觀點，論述了筆—墨—水—紙的依存關係、儒家與墨家的曆史淵源、“文人”與“工人”的合流過程、書法批評的理論緣起、中國書法與日本書道的異同對比等諸多重要且有趣的課題，凝結了松宮先生獨到的藝術史論、藝術史觀，是當代漢字學者、日本學人中難得一見的創新性十足的新說薈萃。

這一部松宮先生的藝術史新論建立在文化人類學的基礎上，書中俯拾皆是的人類學資料和人類學理論引人入勝。用松宮先生的話講，全書的基軸是“類感巫術”（“類感呪術”）。我的理解，“類感呪術”就是弗雷澤（J. G. Frazer）的名著《金枝》（The Golden Bough : A Study in Magic and Religion）中以濃墨重彩之筆津津樂道的“交感巫術”（Sympathetic Magic），包括順勢或模擬巫術（Homoeopathic or imitative magic）和接觸巫術（Contagious magic）兩大分支。若依弗雷澤的定義和松宮先生的分析，則漢字起源階段無論是毛筆書寫還是以刀刻字都更貼近於順勢或模擬巫術。弗雷澤在定義順勢或模擬巫術時列舉了幾個中國的例子，包括一些地區安排年輕女子縫製壽衣的民間風俗和以城市建築佈局之視覺形象聯繫到城市發展前途的風水堪輿。實際上，這確實是中國人善用的一種思維方式，這種“同類相生”“同氣相求”的巫術原理與具體操作可以在中國傳統的衣食住行、政治活動、禮儀、建築、醫療等等幾乎一切的生活實踐和文化理念中找到鮮活例證，可以說，不懂得這樣的思維方式就不會懂得中國。松宮先生第一次如此系統地把中國文字的起源和書寫行為納入這種人類學視域的考察，既有利於中國文化的整體研究，又必將有助於中國文字和書法藝術的探原研究。松宮先生的這部新書，堪稱書道中的“金枝”。

松宮先生這部新書以“結之譜係”為正題，著眼於毛筆的筆頭，亦即獸毛之結的神力。《金枝》在“禁忌的物”一章（Tabooed Things）中專有一節講“結和環的禁忌”（Knots and Rings tabooed），弗雷澤在談到世界很多地區關於結扣的不祥禁忌之後，也談到了在另一些地區，結扣是吉祥之物，那裡的人們相信結扣的線繩有著神奇的力量，特別是對結扣施以咒語之類的巫術之後，這樣的結扣則會實現特定的效能，比如治病救人、贏取異性歡心、阻止配偶逃跑、防止邪靈或野獸侵害，甚至保護魂魄、防止死亡。雖然松宮先生說的“結”（ムスピ）並非弗雷澤所說的結（Knot，屬於傳統認知中的“結繩”），但二者不妨並觀。《金枝》的副標題是“巫術與宗教之研究”，著眼於人類的巫術行為和人類行為的宗教性，比如就巫術的具體內容而言，求雨巫術有著重要的分量，弗雷澤書中還詳細地介紹了中國人以龍來祈雨的法術（Chapter V THE MAGICAL CONTROL OF THE WEATHER § 2. The Magical Control of Rain）。而在松宮先生的研究中，用毛筆書寫的行為同樣具有祈雨的宗教意味，把水注入墨中作為書寫介質，這個行為正是祈雨儀式的縮小版，本質上也是一種祈雨巫術。總之，將名著《金枝》與松宮先生這部新著對讀，是一種有趣的學術體驗。

我想稱松宮先生新書為一部“書道人類學”著作，應該是沒有問題的。除了文化人類學之外，這部新書的涉及領域是廣泛的，至少還包括文字學，比如書中涉及的古文字考證，有“書”“筆”“契”等字的甲骨文考察；漢字史，比如對於筆和墨的創製工藝之考索；經學，比如對《詩經·周南·螽斯》“繩繩兮”的訓解；諸子學，比如對墨子和墨家思想的特殊重視；書法批評（藝

術批評學)，比如對王羲之書法批評的重要概念（“龍”）研究；思想史，比如對“文”的思想範疇與“工”的思想範疇之辨證關係的重點關注。曾有人說，“學術與藝術的關係恰如心與肺的關係”，松宮先生的這部新書，做到了這般貫通心肺的暢快感。無論是學林中人、書法書道藝術創作者、愛好者，我相信都會從這部字數並不很多的書中獲得很大啟發。比如對我而言，讀罷此書，我便更深刻地理解了提筆寫字的嚴肅性和敬惜字紙的道理所在，寫字的本質是與神靈溝通，焉可不敬。在這個敬心崩潰的末法時代，在中國已有很多有識之士主張在青少年中恢復、推廣毛筆字教育，認為以毛筆蘸墨水的這種傳統書寫行為有助於讓人找回失落已久的恭敬心。這個道理究竟在哪裡，相信松宮先生的這部書會給社會大眾提供一種科學的解答。

就我目前所見到的松宮先生的書，除了這一部新書，還有《(新編) 書論の文化史》(2025年1月初版，雄山閣)、《「入れ墨」と漢字—古代中国の思想変貌と書》(2021年8月初版，雄山閣)。這三部書我願稱之為“松宮三部曲”，三本書的學術思想一脈相承，有遞進關係，可以藉此看出松宮先生的學術進路。特別是《「入れ墨」と漢字》與這一部新書的關係最為密切，二者為姊妹篇。《「入れ墨」と漢字》同樣是立足於文化人類學的書法史研究，該書提出：古代中國用來書寫的木簡本來是殉葬之人殉的替身，在木簡上寫字然後埋於墓中，與最初埋葬活人以作陪葬的原理機制相同。這是我目前見過的關於中國古代為何用簡牘作為文字載體這一問題的最新奇同時也最具說服力的一種解釋。這與《金枝》提到的中國古人的祈雨法術性質完全相同。春秋戰國時代的統治者們仍有虐殺巫師以祈雨的習俗做法（“焚巫”或“暴巫”），後來便廢除了殺人祈雨的做法，沿著這種巫術的思路和思維定勢，改為用紙或木頭做的神祇代替被殺巫師的地位和職能。弗雷澤說，“在中國人眼中，龍就是雨神，當需要降雨時，他們就用紙或木頭製作一條長龍，列隊帶它四處轉。如果雨水遲遲未降，他們就撕碎或搗毀這條假龍，並威脅廢黜它的神位。若是雨水及時降臨，他們便公開宣佈晉升它的地位。”（耿麗譯，原書原文為：The Chinese are adepts in the art of taking the kingdom of heaven by storm. Thus, when rain is wanted they make a huge dragon of paper or wood to represent the rain-god, and carry it about in procession; but if no rain follows, the mock-dragon is execrated and torn to pieces. At other times they threaten and beat the god if he does not give rain; sometimes they publicly depose him from the rank of deity. On the other hand, if the wished-for rain falls, the god is promoted to a higher rank by an imperial decree.—Chapter V THE MAGICAL CONTROL OF THE WEATHER § 2. The Magical Control of Rain）祈雨、巫師以及巫師的替身（身代わり），這些要點同樣也是《「入れ墨」と漢字》討論的要點（對甲骨文“嘼”字的討論）。《「入れ墨」と漢字》重點關注書寫的載體，《ムスビの系譜》重點關注書寫的工具，兩書的討論涵蓋了書寫行為最重要的主客體對象，實際上都可稱為“書道中的金枝”。

## 編集後記

ここに、「郭沫若研究会報」第31号をお届けします。今回号は郭沫若岡山留学110周年記念特集として発行いたします。2025年は郭沫若が岡山第六高等学校に留学して110周年になります。2025年11月2-4日、岡山大学で国際郭沫若学会、日本郭沫若研究会と岡山大学がコラボして、「第八回国際郭沫若学会学術シンポジウム—郭沫若岡山留学百十周年記念大会—」を開催しました。ここに収録したのは大会で発表された論文とそれ以外の連載論文と学術大会報告であります。執筆者の皆さんに感謝申し上げます。

ホームページにも掲載いたしました。

今後とも皆さんのご協力をいただきながら、学術活動を更に充実していきたい切に願います。

藤田梨那

### 会費に関するお願い：

電子会報の発行に伴い、毎年の会費については、ホームページにて会費の振り込み番号を掲載します。振込用紙も追って郵送します。よろしくお願いします。

金額：一般会員は2000円、学生は1000円です。

口座：ゆうちょ銀行

日本郭沫若研究会 00230-4-96273

### 本号執筆者・翻訳者紹介

成家 徹郎 大東文化大学 人文科学研究所

名和 悅子 本研究会会員

岩佐 昌暉 九州大学名誉教授

郭 偉 和光大学非常勤講師

堀川 英嗣 北京外国语大学准教授

松宮 貴之 大阪大学外国语学部非常勤講師

藤田 梨那 国士館大学文学部教授